

市民研会員から寄せられた

## 2025 年 私のおすすめ 3 作品

締め切り 2025 年 2 月 16 日、到着順に掲載

市民科学研究室は毎年年末になると、会員の皆さんから「私のおすすめ 3 作品」という原稿を募集しています。その年に読んだ本（雑誌や漫画も含む）や観た映画や TV 番組、聴いた CD や足を運んだ展覧会やライブなどで、多くの人に勧めたい 3 作品を挙げていただき、それらにコメントを付けてもらう、という企画です。2007 年から始めて、毎年『市民研通信』の原稿とさせていただきます。これまでの「私のおすすめ 3 作品」は[こちら](#)に掲載しています。（編集：上田昌文）

### ● 杉野 実

#### 1◆ 「科学コミュニケーション」二題

昨年は Windows10 のサポート修了が話題になりましたが、私もパソコンの買いかえではかなり難儀しました。特に面倒だったのはメールアドレスですね。ある会社と「プロバイダーではないが、アドレスだけを使う」契約を結んでいますが、初めはそのことすら先方によく理解されず、そのわりには先方も合併をくり返してきていて社内でも連絡がいきとどかず、それでいて顧客むけ電話オペレーターがひとりしかいなくて…と散々でした。一方市川市の公民館で生命保険会社が(!)開いた「血管」講座には新発見がありました。「脳梗塞で体の一部が麻痺すると、治療とリハビリをへても、後遺症で不安神経症になることがある」というのですが、これには私がお世話になった中学の先生が、「以前はひとりで外国に出かけて（あちらの学校で）ワークショップなどするほど積極的だったのに、最近急に『ズームがこわい』といいだした」事例が該当すると思ったのです。

#### 2◆ 「日常生活で出会った興味深い物理現象」二題

これには画像をつけます。まず図 1 は「円状にひびが入って割れた円形の皿」ですが、みなさんはこんなものを見たことがありますか？いくら陶磁器は「非晶質」で、したがって決まった形では割れないといっても、これはかなりめずらしいのではないのでしょうか。「数理解析」などするほどの専門知識はもとよりありませんが、ただネットをざっとみたら「地震による建物の被害が、震源を中心とする同心円状に分布していた」事例が見つかりました。図2は説明しなければわからないと思いますが、こうです。「キャンディの包み紙を、両端を引いてあげようとしたら、一方の端がやぶれてしまった（それ

だけならまだしも…ですが)ばかりか、中のキャンディが勢いあまって飛び出した」。いやおどろきました。外力と摩擦力のバランスと、そして材料強度の加減いかんでは、こんなこともおきるのですね。この手の現象を「解析」した論文も、ほかの例ではみつかることがあります。



図 1



図 2

### 3◆ 小唄勝太郎『柳の雨』

ジョーン・サザーランド『柳の歌』

エラ・フィッツジェラルド『柳よ泣いておくれ』

(「音響彫刻」のかわりに) [The appeal of “freedom and diversity of expression” \(Calligraphy Art Academy Avant-garde\)](#) (これで検索できなかつたら「前衛書道」をつけくわえてみてください)

最後に私がユーチューブで出会った音楽作品(そう音楽です、一応…)を紹介します。市川のうちの近くに、「柳の名所」というほどではないけど、柳の木がまあ印象的な場所がありまして、そこを通ったときに、「*Willow Weep For Me*というジャズの有名曲があるけど、クラシックや純邦楽ではどんな柳の曲があるのだろうか」とふと思って、さがしてみたのですね。「勝太郎」さん(芸者名前ですね)もふくめて女性歌手の歌ばかりになりましたが、小唄にもジャズにも派手な鳴り物やオケがついて、ヴェルディオペラ(『オテロ』)の aria に十分対抗できるものに仕上がっているのが楽しいと思いました。最後のはまあつけたしてはありますが…前衛書道なら(「絵柄?」が)柳ともまるで無関係でもないし、とにかくユーチューブで「前衛音楽」を検索したら出てきたのだから、これも「音楽と思えば音楽だ」ということであげました。「聞く」こともできますよ、ハイ…

**●吉岡寛二****1◆「大阪・関西万博」(2025/4/13~10/13、大阪夢洲)**

この大イベントはすでに終了しているので、強くおススメしても追体験ができません。私は大阪府茨木市に住んでいるので、通期パスを購入して 15 回も行った者としては、昨年中の一番大きな体験でした。関東と違って、大阪およびその近辺では非常に盛り上がっていました。各国のパビリオン等では、その国の政府が日本に対してどのように考えているか、そしてそれを工夫して表現しているのがとても興味深かったです。

例えば、中国パビリオンはその外観には度肝を抜かされますね。万国博覧会は、その各国の宣伝とともに開催国に対する敬意が普通はあるものですが、日本に対する、上から目線による自己正当化の歴史認識を強く感じました。

ポーランドパビリオンでは、京都国立近代美術館で開催中(3/25~6/29)の「若きポーランドー色彩と魂の詩 1890-1918」の招待券を無料でもらえました。入場料が 2000 円のところタダになってラッキー!ちょうどその頃のポーランドを知らなかったのですが、絵画も時代を反映して陰鬱さが立ち込めており、まわりの大国にいじめられ続けていたことを感じました。

**2◆「ジュディ・オングの木版画展」(2025/3/14~4/9、旧門司税関)**

ジュディ・オングさんの作品を紹介する展覧会「木版画の世界展」が、昨年 3~4 月に北九州市門司区の旧門司税関で開かれていました。旅行中に門司港レトロ街を散策していた時のことですが、特に木版画が好きだったというわけではなく、ただジュディ・オングさんの名前に惹かれて入ったのです。日本家屋や花をテーマにした初期の作品から最新作まで大小約 70 点を展示していたのですが、その素晴らしさに強い衝撃を受けました。今後も、どこかで個展が開かれるかもしれません。

**3◆「京都鉄道博物館」(2016 年開館)**

市民研の会員の中には鉄道オタクの方もおられるようですが、私は鉄道ファンではありません。とはいえ技術や歴史特に近現代史に関しては何でも興味があるので、鉄道に関するいろいろな事実にも興味があります。門司にある鉄道博物館に立ち寄ったことがキッカケですが、京都にも鉄道博物館があったことを思い出して行ってみました。特に明治時代の歴史は興味深くて、とても満足しました。

京都鉄道博物館では、機関車トーマスではありませんが SL に乗ることもできます。

## ● 谷 俊一郎

## 1◆ 烏賀陽弘道(2025)「プロパガンダの見抜き方」新潮社(新潮新書)

255 ページ、960 円+税、ISBN:978-4-1061-1079-5

著者の烏賀陽氏とは、2011.3.11 後に当時の Twitter で数度やり取りをしたことがある。同年代でもあり、新聞社関連の共通の知人も多くいた。

本の内容はどのようなものかという、第 1 章 どう生まれ、どう発展したかープロパガンダの歴史で、「ナチス・ドイツもアメリカも「大衆心理学を応用したプロパガンダ」という点では、やっていることは実は同じだった。」とプロパガンダの本質を喝破している。

第 2 章 現代日本人は何に乗せられたかー成功した 2 例の研究 の 1 例として望月衣塑子記者とイオングループの関係を見抜いているが、当時の状況を顧みて、妙に納得感があった。

全編を通してとても平易で分かりやすい実例をケーススタディ的に取り上げており、メディアや PR そして SNS・スマホが猛威をふるう渦中で、さらには AI の跋扈する

”今”、フェイクを見抜く技術としてこの本で学んだ知識は役立ちそうである。

## 2◆ 西谷 修(2020)「私たちはどんな世界を生きているか」講談社(講談社現代新書)

270 ページ、900 円+税、ISBN:978-4-0652-1445-9

200 年間の欧米や日本の動態について、事実を語りかける形で俯瞰している。日本については、天皇制や元号について制度に関する疑問を投げかけ、また原爆投下後の大本營の振る舞いについて、「日本の旧支配層は、みずからアメリカに隷従することで、日本における統治層という地位に留まることになったのです。」(P.207)と書いている。

2026 年の年明けと同時に現在進行形で起きている米国の横暴とも言える干渉や、それに対する日本の首相の発言なども、この本からその本質を読み解くことが出来る気がする。

この本を知った契機は、石井一也氏の「身の丈の経済論」について市民研主催でオンラインの勉強会があった時に、石井氏が一瞬、西谷修氏の著書「アメリカ 異形の制度空間」をカメラに写したのが気になり、そこから興味が沸いて読みだした。

## 3◆ 上遠恵子編著(2025)「センス・オブ・ワンダーを語る」かもがわ出版

213 ページ、2,000 円+税、ISBN:978-4-7803-1390-1

市民研通信第 82 号の「戦前の在野の「知」のネットワークを探るー民俗学・郷土研究、生物研究そして趣味の世界-(神川隆)」で紹介されていた、チャプコヴァー・ヘレナ編『非凡の人三田平凡寺一趣味家集団「我楽他宗」の磁力』も同じかもがわ出版である。

2025 年 4 月 3 日に亡くなられた畠山重篤氏の話が読みたく購入したが、山際壽一氏の話の中には山尾三省氏を取り上げられていたり、中村桂子氏は上田代表のお知り合いだったり、自分の興味の方向性が自分の身の回りや知識とこっぴどとシンクロしてきている感じがした。今年もレイチェル会員として自分に出来る最大の努力を継続したいと思う。

## ● 池澤 一廣

### 1◆ ハイパーテキスト情報整理学(実践編) ISBN4-8227-2050-0

書名に「情報整理学」とあるように、この本は情報を整理して表現するための「インフォメーションマッピング法(IM法)」というメソッドの解説書です。IM法についての情報は極端に少なくなっており、本書も既に古本でしか手に入りません。置いてある図書館も全国で数えるほどです。

つい数年前までは日本にも代理店がありセミナーが行われていましたが、現在では日本の代理店も消滅しました。極めてマイナーなのですが、20年ほど前に私が参加したのは、当時の金額で15万円ほどの高額セミナーでした。

では、このインフォメーションマップ法とはどんなメソッドなのか。「構造化ライティングの手法であるInformation Mapping法」と謳われています。

IM法は書き手にとっては伝えたいことを整理して受けてに伝わる文書を書くことができるというメリットがあり、受けてにとっては情報の全体をより速く正確に把握することができるというメリットがあります。

私は数年おいて2回のセミナーを受講し、『「この文書はIM法を使っています」と言ってもよい』というライセンスを取得しました。誰かに伝えるというより自分で情報を整理するときに使っています。

国会図書館や全国のいくつかの図書館で読めると思います。「カーリル」などでお調べください。

IM法の本家は、<https://informationmapping.com/> です。

### 2◆ 才能の科学 ISBN978-4-309-30022-1

筆者はオリンピックに出場したほどの卓球の選手です。そして自分の卓球について分析した結果、自分がオリンピックに出場できたのは「才能ではなく練習だ」といいます。練習といっても漫然としたものではなく「目的を持って集中して行う練習」が必要だ。そしてその目的を持って集中して行う練習を10年間はやる必要がある、と。10年というとおよそ10000時間の法則に合致します。自分は15年ほど前から何年か英語の発音の教室に通っています。途中何年も間が空いていますが、学校の英語の授業も含めると、もう少しで10000時間に届くかなと密かに思っています。集中した自主練もできていませんし、実際に英語を使って誰かと話す機会も持てていませんが、本書に励まされて諦めずに英語を続けようと思っています。

### 3◆ 参加のまちづくり入門演習

2010年に参加したワークショップの資料です。

横浜の町を歩いて「これなんかいいな」と感じる建物や街並み、光景などを探してみよう、というワークショップです。

2時間ほど歩いて、各自のメモを整理し、発表しながらそこに現れる「パタン」を抽出してみました。クリストファー・アレクザンダーという人が提唱する「パタンランゲージ」というメソッドをまちづくり

に適用するものでした。私も 10 ほどのパターンを抽出できました。たとえば、「リバーサイド」「段状に並んだ住宅」「手作りのまち」「公共の空間」……といったものでした。

パターンという視点を意識して街を歩くと見え方が違ってきて、面白い経験でした。

このワークショップの資料やアレクザンダーの書籍「時を超えた建設の道」他など持っています。

上記書籍、資料などご希望があればお貸しできますのでご連絡ください。

## ● 谷 敦 @市民研 6 年生

### 1◆ 『記録をひらく・記憶をつぐむ／国立近代美術館』

戦時下に描かれた戦争絵画の多くが、戦後 GHQ に押収されアメリカに持ち去られていたが、その多くは日本に「永久貸与品」として戻されているという。それらは日本では新たに展示・鑑賞される機会もほとんどなかったと思われるが、戦後 80 年となる 2025 年に、企画された絵画・資料展である。それらはかつては「戦争協力」という基準で見られ、責任が糾弾されることばかりが多かったようだが、それを別の視点で、つまり、一枚の絵画として、社会変化の真ただ中の記録として、或いはまた女性の社会進出の一面として、戦闘の行われた当事国の民衆の視点から……等々、いろいろな視点から観られることはこれまで殆どなかっただけに、貴重な展示会であった。来館者も「年寄りばかりでは」という私の予想とは違い、若者たちが結構見に来てくれていることも印象的だった。

### 2◆ テレビドキュメンタリー『ヒトラーの本棚 ナチズムの源を読み解く』と

#### 『White Man Walking 分断されたアメリカの素顔』

悪いヤツを固定化し、決定することが出来れば話は簡単かもしれない。ヒトラーも異常で邪悪な人間が狂気に走ったと考えられがちだが、このドキュメントは、彼が数か国語に通じ、数千冊の本を読む大変な読書家、知識人であったこと、そして多くの知識人や作家、出版業界人達がヒトラーの登場を歓迎し、彼を祭り上げて行った過程を丹念に描き出しているのが出色。

似たような考え方の人間が寄り集まり、短期間に勢力を拡大してゆくというのは、決して近年の SNS の普及だけが主たる原因ではなく（時間的な長短の差はあるにせよ）、人間社会が陥り易い落とし穴であることを明らかにしていく。

ドイツを始め多くの国々がナチズムの再興を阻止すべく長年にわたり努力を重ねて来たにも拘わらず、今では多くの国でそれに類する政党が跋扈している様をみると、ナチズムや独裁への暗黙の願望は我々自身の内に眠っている物と認識すべきなのかもしれない。

後者はアメリカ南部ミシシッピ州から”Black Lives Matter”と大書きしたTシャツを着て、歩いてワシントンを目指す白人青年のドキュメント。「賛同する人は、短い時間でも良いから一緒に歩こう」と声を掛け乍ら 4,000km もの距離を歩く。南部からの北上なので当然、彼は初めは敵視され、決して歓迎はされないのだが、それでも彼は対話を重ねることを諦めない。その前向きな姿勢

と、考え方の異なる人々の中に飛び込んで、少しずつでも対話を重ねようとする姿に頭が下がる。アメリカの民主主義の、素朴だが力強い面に引かれると共に、「もし、この人が黒人であったとしたら多分途中で殺されていただろう」という率直なコメントにアメリカの現実を見る思いがした。

前者は、「人間の本性はむしろこちらに引き寄せられるのかもしれない」という自覚を呼び覚ましてくれ、後者は逆に「周りの環境に引きずられずに物事を直視し判断し表現していくこと、分断ではなく対話を重ねていくことの困難さと重要性」を感じさせる物だった。

### 3◆ 『つぐ ミナ・ペルホネン／世田谷美術館』

#### ～本『僕たちはファッションで世界を変える／イノウエ ブラザーズ』

創業以来、約 30 年の姿勢が評価され、根強いファンを持つミナ・ペルホネンの、手の揺らぎを生かし温もりの感じられるデザインとそれを生かした生地制作。その一つ一つ、織る・刺繍する・プリントするに関わる職人たちの仕事の一端が垣間見える展覧会。

完成品の服ではなく布と制作の工程（職人の手仕事）に主眼が置かれた展示となっている。

ミナ・ペルホネンに協力する職人たちのインタビュー（VTR）も流され、その中のひとつ、イノウエ・ブラザーズによる、ファストファッションから離れた真っ当なデザイン・ファッション・消費・経済・文化・歴史……の連関に思いを馳せる。

ファッション業界の只中に身を置きながら、大量生産・大量消費・大量廃棄・経済発展・資源枯渇・環境破壊・劣悪な労働環境・低賃金労働……に何とか抗いながら、生産者やその辺境の地に生きる人々の生活を支えつつ生産を続けようとする人々がいて、その数（理解者、協力者）は少しずつだが増えていることを知り心温まる思いがした。彼らのエネルギー源の一つがブラック・ミュージックであったりマハトマ・ガンジーであったりすることにも共感を覚えた。

### ● 権上 かおる

2025年6月に、35年以上環境調査の活動を共にした増田善信さん（気象学者）が101歳で亡くなりました。水爆実験による“核の冬”問題をカールセーガンらの30年以上前に指摘し、台風の進路予報など最初期の数値予報にかかわっておりました。被爆者との約束から一人で始めた広島“増田雨域”が、2021年の原告側勝利の確定判決の原動力になりました。

私の個人的事情から、3作品は増田関連の書籍とさせていただきます。

### 1◆ 丸浜江里子 原水禁署名運動の誕生：東京・杉並の住民パワーと水脈 （有志舎 2021年）

気象研究所は、つくばに移転する前は、杉並区高円寺にありました。戦後、増田さんも入庁時は、気象研勤務でした。当時の新興住宅地であった杉並区でおこった署名運動をもとに、現在の原水爆の禁止運動そして被爆者団体協議会の誕生につながりました。丸江さんは、公立中学の教員退職後、明治大学大学院へ進学、本書の精緻な記述の原点は、このときの修士論文です。

ビキニ実験で魚が売れなくなった魚屋さん、東大を追われ赴任した公民館館長など、多彩な登場人物が署名運動を構築していきます。杉並区民だった朝永振一郎さんも学習会の第一回講師として「原子のはなし」をされています。

そしてなにより、女性たちの活躍がなくてはならないものでした。このような運動の記録としても稀有な一冊と言えます。

## 2◆ 増田善信 地球温暖化を理解するための異常気象学入門

(日刊工業新聞社 2010年)

増田さんは、85歳で本書を上梓しました。当時、なぜ地球が温暖化すると異常気象が増えるのかというメカニズムのお話はほとんどなされていませんでした。

温暖化による異常気象には、2つの要因があることを明確に指摘しました。

(1)地球大気すべてが高温になるのではなく、地表面は高温化、高層は低温化すること。このため大気の上下不安定が生じやすくなり、局所的、短期的激甚気象を生むこと

(2)北極南極がより温度上昇することにより赤道との温度差縮小。極から赤道への大気の流れが縮小し、コリオリ力に基づく偏西風が弱まり、長期的に同じ気候が続く

15年経った現在では、偏西風の蛇行などの原因は、時々見聞しますが、本質的な原因説明などを論じた解説は変わらず少ないと感じます。

そして、16年経った現在、指摘された異常気象現象は、世界各地で頻出する状況となっております。

## 3◆ 小山美砂 気象学者 増田善信 深淵に生きた101年

(本の泉社 2025年)

昨年は日本の気象事業150年にあたります。増田さんは17歳から京都宮津測候所に入所し、気象観測を行っていました。リタイア後も毎日の天気図も NOAA (アメリカ海洋大気庁) も含め、チェックしていたそうです。気象事業150年のうち半分以上にかかわっていたこととなります。それまで断ってきた自伝について2024年秋に作りたいとおっしゃり、その準備を進めていた中での逝去でした。著者の小山さんと私がインタビューをし、長い付き合いの中での資料を提供して、「原爆『黒い雨訴訟』(集英社新書)」で JCJ 賞を受賞された小山さんが一冊にまとめました。

一世紀にわたる人生そのものが、歴史です。戦前の小作人制度の矛盾、軍隊の不条理、気象将校としての大社基地勤務は、気象自体が機密事項で天気予報も漁師などに知らせることができなかったこと、戦後気象庁での大量首切り、第5福竜丸事件から着想した“核の冬”の立証を大規模火山の噴火を調べ立証する試み、官公庁へ初めて導入されたコンピューターでの数値予報の確立への奮闘、離島のような厳しい労働条件での職員の待遇改善、おもなものだけでも一人の間でなせるとは思えないものです。

また、強く感じるのは、先人の教えを吸収し、実践していると感じることです。気象の父といわれる岡田武松氏の「学問的基礎のうえに世の中の役に立つこと」、朝永振一郎氏の「議論は身分に関係なく、平等に行うこと」、坂田昌一氏の「コンピューターは道具に過ぎない」「研究には観察と発想

が重要」などを生かしていると感じます。

そして、常に弱者への温かい眼差しがあります。一人で、自費で始めた広島原爆の“黒い雨”調査はまさにこの視点です。

分断と憎悪がはびこる現在にこそ増田さんの口癖「世のため人のため」を実践してきた101年の生涯を知っていただきたいと願います。増田 Web も参照ください。(気象学者 増田善信人と業績 <https://masudakishou.org/>)

## ● 鈴木 綾

### 1◆ カフネ 阿部暁子 講談社

カフネとはポルトガル語(!)で「愛する人の髪にそっと手を通す仕草」だと。とても繊細なタイトル…と読み出すと…主人公の野宮薫子(41才)は不妊治療を続け、やっと授かった子も流産してしまい、共にその悲しみを受け止めたはずの夫からも別れを告げられ、年離れた大切な弟が突然死してしまったのをきっかけに絶望し、アル中になりかかっている! 法務局のベテラン職員として働き続けてきたから、ボロボロの状態でも仕事には行けど、些細なことで突然怒りの発作に襲われ、周りから引かれているのも自覚しながらどうにもならない。とにかく弟の遺言にあったとおり、弟の恋人に遺産を渡さねばと彼女に連絡を入れ続ける。やっと会えた彼女は絶対いらないと断り、薫子はなぜ断るのかと尋ねているうちに激昂して失神してしまう。彼女は薫子を病院に送ると言うが、それを拒否すると家まで送るとついてきて、薫子が絶対見られなくなかった汚部屋に踏み込み、ほとんど空の冷蔵庫にあるものだけで体にしみわたる食事を作ってくれる。彼女は「カフネ」という名の家事代行会社で食事を作る仕事をしているのだった。薫子は久しぶりにきちんと食事をしてきちんと休み、悔しさと恥ずかしさにさいなまれながら、自分の心身が壊れかけていたことを自覚し、久方ぶりに吞まずに大掃除をする。あらためて様子を見に来た彼女はその見事な部屋の片付けぶりに薫子をカフネの社会貢献活動にリクルートする。亡くなった弟が彼女と組んでセルフネグレクトになっている家庭へ無償で食事作りと掃除に行っていたと聞いて、薫子はその誘いに乗る。何しろ弟にお片付けの極意を仕込んだのは薫子なのだ。彼女の素っ気なさとは裏腹のゴハンの美味しそうなこと。支援に行った家庭に合わせ、なんとか続けていけそうな提案をしながら3日分のゴハンを置いてくる。食べること(体)が心をどんなに支えるか。そしてゴミ屋敷が片付くと、お家に安らぎが見えてくる…。薫子は、彼女がこんなに腕がいいのにどうしてこんな仕事をしているのか、弟はなぜ死んでしまったのか…と謎を追いかけていく。少しずつ見えてくるのは薫子が知らなかった弟の姿…。彼女のかたくなさの理由も…。

「2025年本屋大賞」作品。「本屋大賞」って本屋さんが「いちばん売りたい」本という賞だとか。その評価基準は「品がない」と怒っていたのは誰だっけかな…。最寄り駅周りに本屋さんが無くなってしまった街の住人としては、本屋さんが本を売り続け、ちゃんと存続できる街であってほしいと願うばかり…。

## 2◆ 絵本「すきっていわなきやだめ？」辻村深月/作 今日マチ子/絵 瀧井朝世/編(岩崎書店)

おんなのこたちのあいだで、すきなひとに「すき」っていうのがはやっている。「すきなひといないの?」と、みっちゃんにきかれて、「わかんない」ってこたえたら、「じゃあ、それはすきじゃないんだよ」っていわれた。だけど、ほんとうはこうくんがすき。うれしくて、かなしくて、くるしい…。このきもち「すき」でいいのかな?

～西東京市図書館 本の内容より～

「恋の絵本」シリーズその2。人を好きになるってどういうことか…。説明するのは大人だってむずかしい。こんな絵本が出たんだなと手に取り、うんうん、と読んでいって、最後に「!!!」と。読んだ後にもっと考えることが増えるけど、読んでよかったと思えた絵本。小学校の高学年の学級文庫とかに、なにげなく入っているといいかもなあと、思う絵本です。

## 3◆ 文化座「螢の光 窓のイージス」作:畑澤聖悟 演出:西川信廣

## &lt;STAFF&gt;

美術:横田あつみ 照明:塚本悟 音楽:上田亨 音響:齋藤美佐男 衣装:山田靖子 舞台監督:鳴海宏明

制作:原田明子 ドラマターグ:工藤千夏 協力:渡辺源四郎商店

## &lt;あらすじ&gt;

2017年、日本政府はイージス・アショア(陸上配備型のミサイル迎撃システム)の導入を決定し、翌年秋田と山口の配備を決定した。秋田において適地とされたのは秋田市新谷地区の陸上自衛隊新谷演習場。県民・市民の意見は賛成と反対に分かれ、秋田を二分する論争となっていた。

2019年3月1日、配備地から300メートルの距離にある私立米倉学園秋田城西高校(架空の高校)3年部の職員室。卒業式が2時間後に始まる朝8時、3年2組担任の森教諭が答辞を読む卒業生代表の菊地みやびを呼び出した。答辞にイージス・アショアに関する内容が含まれていることが判明したのである。このままでは大騒ぎだ。「この部分をカットしてもらえないかしら?」しかしみやびは拒否。学年の教員団はみやびを説得する。卒業という、特別な1日の揺れ動く教員たち、生徒たち。卒業式は間もなく始まる。果たして答辞はどうなるのか!?

～文化座 HP より～

舞台には卒業式の朝の職員室のセット。2方に出入口。その先には廊下がある。壁の時計は「8時」。この時計の刻々が舞台上の物語の進行時間と重なる。最初は早出してきた先生同士の「この学年」の思い出話や答辞を述べる代表生徒の評まで、一区切りを迎える日の、穏やかな雰囲気。が、袴姿の神経質そうな女性教師がセカセカ入室してきて雰囲気が変わっていく。彼女は昨日の予行練習で初めて答辞の内容を知り、答辞でイージス・アショア配備について述べられるのは「不穏当」と感じ、担任する卒業生代表生徒を呼び出し、その部分を削るよう指導するが、本人は「一部を変えたら言いたいことが全部変わってしまう、少し考えさせてください」と職員室を出ていく。担任は学年主任の答辞指導担当教員にも文句を言う。「生徒が言いたいことを言うのがよい答辞」と返す学年主任に、担任は「経営を握る理事長が知ったらどうなるか、気に入らないとなればこの学校を廃止するかも」と懸念を語り、学年主任も「そんな!」と青ざめる…。新任若手教員は「イージス・アショアが配備されたら、そこを他国が狙う先となる危険を招く、反対しなくちゃ」と言い、軍備オタクの演劇部顧問は「イージス・アショア配備、上等! 答辞は瞬発力の利く演劇部生徒に、差し替え原稿を覚えさせれば問題ない」と言う。「そもそもそれはどういうものなの?」とまもなく産休の女性教師がつぶやき、膨大な予算がつぎ込まれることも話題になる。「その金額があれば、人家に近づきすぎて『駆

除』されるクマを全国から集めて厳重に囲った山に放ち、その山で 10 年は暮らさせることができるんだが…」と生物科教師もつぶやく。そして刻々と開式時間に近づき、式場の体育館準備のトラブルが持ち込まれたり、他学年の生徒が用事で来たり…見えない舞台の向こうでも時間が流れているのが感じられる…そして、答辞を述べる生徒が、いるはずの教室に見当たらず、校内のどこにいるのかもわからない…ほら、もうあと 1 時間を切った…さあ、どうする？ さて、どうなる??

脚本の畑澤聖悟氏は青森で高校の先生を続けながら劇団を主宰し、脚本を書き、地方にいてこぞできる芝居を創っている。初めて畑澤聖悟の名を意識したのは、青年劇場の『修学旅行』を観た 2011 年年末。(多摩北子ども劇場 9 劇場最終合同例会だった…)沖縄へ修学旅行に行った青森の高校生が宿の一室で繰り広げたバトル…。舞台は動かないのにそこにつながる外界が見えて、歴史の中に生きている自分も意識するようなスゴイ観劇体験だった。以来、畑澤聖悟の名は私のアタマに刻まれた。今回もスリリングな時間を満喫。実際のイージス・アショアの顛末は 2020 年 5 月に配備しないことが決まったと劇中でも「ニュース」としてスクリーンに写される。でも、それで何か解決したわけではない。だけど世界が、日本が、強権になびく流れに巻き込まれて行こうとしているような今、地元で起きている問題に気づき、その地の歴史につながっている自分を見つめる高校生を書いて、次代とその周りの全ての人に考えることを、話し合うことを諦めないで生きようと語りかけてくれるようだ。

ちゃんと生きていくには巻き込まれない意思がいる。井上ひさしの「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくまでゆかいに」という言葉が座右の銘という畑澤さん。また劇場でお目にかかります。

## ● 丸山 節子

### 1◆ 只見線

9 月末から 10 月初めにかけて、会津若松へ小さな旅に出ました。旅のテーマは、「ローカル線に乗ってみよう」。

旅の 2 日目 10 月 1 日には、早朝から JR 只見線に乗車。雨模様で、山霧・川霧が湧きあがりたなびく幻想的な車窓風景にこころを奪われてしまいます。

偶然にもその日は(2011 年 7 月の新潟・福島豪雨による被害の影響により最後まで不通だった只見⇄会津川口間も含めて)全線再開通してから 3 周年という記念の日。車窓から見える景色からこちらに手を振って歓迎してくださる方々の姿も嬉しく、その列車の終点会津川口まで。駅前のパン屋さんの店主のおばあちゃんとのふれあいも楽しく、待ち時間もあつという間でした。

復路は途中の会津柳津で途中下車して、赤べこ発祥の伝説もある「霊巖山円蔵寺」へお参り後、次の電車まであと 2 時間。おりしも激しい雨で散歩もままならず、駅なかで過ごしていると…全開通 3 周年の記念列車を待ち、駅ホームで歓迎の準備をしている有志の方から「旗が余っているので一緒に旗振りをしてもらえないでしょうか?」というお声かけをいただき、なんと「観光客」から「歓

迎の旗を振る」立場に!!皆さんと一緒に旗を振って記念列車を見送りました・・・土砂降りの景色も限りなく美しいのです。鉄道が愛され必要とされ、沿線地域の熱意で支えられている事がよくわかり、ほんの少しのお手伝いに参加できたことは忘れられない思い出になりました。

各地から「廃線・短縮」のニュースが次々と聞こえ続けています。「鉄道」の役割は、単に交通機関ということではなく、「ここで生きていいよ」と支えられている皆さんの熱意なのだ強く感じました。作品「歓迎の旗・おかえり」は会津柳津駅のホームで振った旗のイラストの部分。大切に持ち帰り、壁に飾っています。また、あの景色や皆さんの中に自分を置いてみたいと願うのです。地域の人々に愛され、異世界へと誘ってくれる不思議さも併せ持っている、そんな只見線が永遠でありますように。



## 2◆ 月刊 たくさんのふしぎ 2024年6月号 福音館書店

### 「ウム・アーザルのキッチン」 菅瀬 晶子 文 平澤 朋子 絵

文化人類学者の菅瀬晶子さんの存在を知ったのは、1年以上前になるかと思います。癌の末期を宣告された後「X」での愛鳥の写真とともに「この子を残して死ぬことはできない」というポストをたまたま見たのがきっかけです。@ruzbihalib 文化人類学者として、国立民族学博物館のパレスチナ研究者として、パレスチナの人々に寄り添う日々を送って来られた菅瀬さん。闘病中も「X」を見ながら一喜一憂していたのですが、2025年4月4日に帰らぬ人となりました。

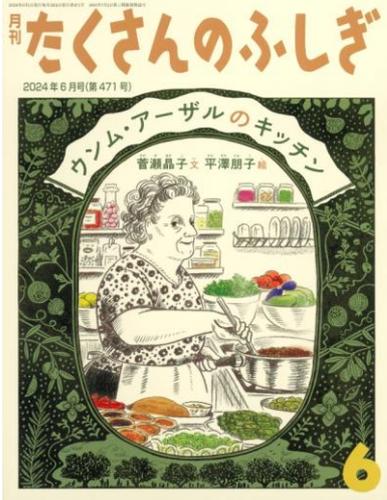
菅瀬さんの存在を知ってすぐに手にすることができたのが、この「ウム・アーザルのキッチン」でした。(既に新刊は完売 中古も在庫がほとんどなく、運が良かったと思います)

まずはイスラエルにおけるユダヤ人とアラブ人の関係(差別や貧困)、国の状況が語られます。そして、子どもの頃におばあちゃんから家庭料理を学び、今はおばあちゃんとなったウム・アーザルのいつもの一週間が物語の中心となります。家族のいのちと元気のみなもと、素朴でも美味しいお料理。ごくありきたりの日々が淡々と綴られています、私たちの何気ない日常と同じように・・・菅瀬さんがパレスチナの人々の生活に寄り添い、状況を憂いつつ注いだ愛情を感じ、その尊さがこころに残ります。こども達にも読みやすい内容になっているところがすばらしい。

もっと早く菅瀬さんの事を知っていたかった。そして、講演会などに足を運びたかったと、ここから残念に思い、まだまだ止まない空や地からの爆撃や銃撃などを思い、どうしてこんな事が許され

続けているのかと、辛い気持ちでいっぱいです。パレスチナの平和を願います。

福音館書店のホームページより





**ウム・アーザルのキッチン**  
 たくさんのふしぎ | 2024 年 6 月号

イスラエルに住むアラブ人のおばあさん、ウム・アーザルは、大変な苦勞をしながら子育てをしました。うれしい時かなしい時も、彼女の力になったのは子どもたちにおぼえた料理でした。文化人類学者の菅瀬晶子さんがウム・アーザルの家族といっしょに生活して見たことを、パレスチナの食文化をまじえながら描きます。

3◆ イギリス BBC 制作ドラマシリーズ 「ブラウン神父」(Father Brown)

ブラウン神父シリーズは、G・K・チェスタトンの原作小説をもとに制作された人気ドラマシリーズです。舞台は 1950 年代のイギリス。ブラウン神父役は、マーク・ウィリアムズ。(ハリー・ポッターシリーズ ロン・ウィーズリーの父親アーサー・ウィーズリー役でも有名)

舞台は 1950 年代 第二次世界大戦の名残が色濃く残る時代の架空の村。その名も「ケンブルフォード」(ケンブリッジとオックスフォードのミックス地名のようなのでこれも面白い!) 主人公のブラウン神父は、なぜか英国教会ではなく、カトリックの司祭で、古い自転車で教区を走り回りつつ警察とは異なる視点から事件の真相に迫ります。



犯人探しそのものよりも、人が罪に至るまでの心の動きや、赦しのあり方が描かれる点が、このシリーズの大きな特徴です。科学捜査の無い時代に深い洞察力を持ち、人のこころに寄り添いつつ教区で起こる事件を解きあかしてゆく神父の姿やことばに触れながら

支援の場に居る身として学ぶことも多く、辛い事があった時に見るといつの間にか気持ちがすっきりしている不思議な番組です。

神父を支える周りの人々や、担当警部とのやり取りなどコメディとしての要素もあるのも人気の理由だと思います。大戦・インド統治の傷跡、身分や出身地にまつわる偏見や差別、新興宗教、宅地開発・鉄道問題、麻薬、同性愛・・・テーマとしては多岐にわたり、かなり具体的なところまで踏み込んでいるのですが、まさに現在の社会にも通じている内容ですので、興味深く受け取る事ができます。古い町並みや、屋内の家具やファブリック、食器、女性の服装など、細部まで丁寧につくられているのがとても魅力的で、紅茶と手作りお菓子が大好きなこの町の人々にも親しみがわいて、人気のほどが良くわかります。「ブラウン神父」に出会う事ができて本当に良かった！ここに残ることばを書き留めながら、もう一度シリーズの最初から見直したいと思っています。

(Amazon Prime や Hulu などのサブスクリプション経由で 見る事ができます。さらに13シリーズまで制作・放映中とのこと。)

## ● 松田 美恵子

### 1◆ ファイナンスの世界史 金融技術と金融ビジネスの歩み

大村敬一 日本経済新聞出版 2025年7月16日

毎日、株価の更新、為替の変動、利上げ動向など、金融にかかる情報が飛び交っている。日本は資産運用立国を目指すという。中学・高校には金融経済教育が導入されている。金融知識をつけて着実な資産運用能力をつける、ということだけでなく、金融とはどういう仕組みで、社会のどのようなニーズにこたえているのか、ということも知っておきたいと思い、筆者は金融経済については全く素人だが、歴史というところにひかれて本書を読んだ。

本書では、中世ヨーロッパから、現代までのファイナンスや金融制度の発展過程を概観している。ファイナンスとは資金を調達・運用する方法、金融とはそのための手段・機能、くらいにとらえておいてよさそうだ。

中世ヨーロッパでは、十字軍遠征による巨額の戦費調達、交易拡大を通じて、決済機能やファイナンス機能に対するニーズが高まった。宗教騎士団が貸付や資産預かりなどの金融サービスを行っていた。

大航海時代に入り、近代株式会社の原型ができてきたこと。17世紀以降、国家財政窮乏の対策として国債の発行や中央銀行の創設が始まったこと、特定多数からのファイナンスの工夫として証券化が始まったが、20世紀に入り、小口化・標準化とコンピューターや通信技術の発展が相まって、金融エンジニアリング(金融工学)が発生したこと、そして近年のデジタル化の動向、など時代を追って記載されている。

わからない専門用語も多いが、当時の有名な人物やエピソードが豊富に紹介されており、最後まで読み通すことができた。人々の飽くことなき資金ニーズと社会体制の変化が、金融システム発展の原動力のように感じられた。

## 2◆ 手術はすごい 石沢武彰 ブルーボックス 講談社 2025 年 1 月 20 日

ロボット手術が話題になる一方で、実際の手術では、糸の結索など人の手による手技も大きな役割を持っていることがわかる。最新機器だけでもゴッドハンドでもない。著者の言葉を借りれば、“現代の手術は、洗練された医療機器と治療戦略、修練を積んだ外科医の技能、そして患者の治癒力で成り立っている。”

手術前の計画から器材の説明、メスの持ち方や縫合などのテクニック、実際の手術例などがイラスト入りで具体的に説明されている。

手術が様々な技術の積み重ねであって、ロボットも AI もその延長線上にある。

著者は、医学生や受験生に向けて、女性だから、不器用だから、体力がないからなどの限界を作る必要はなく、何かしら自分の中に強みになる能力があれば、手術という治療法にキラリと光を感じたら、是非、外科医にチャレンジしてほしい、と語っている。

## 3◆ 雨の日の心理学 こころのケアがはじまったら 東畑開人 角川書店 2024 年 9 月 2 日

“晴れの日には正しいケアも、雨の日には間違いになることがある。”

“「頑張ったね」のひとつが、相手の心に届いてケアすることができるのは、晴れの日”

“「頑張ったね」と言われても、こころに響かず、かえって相手を傷つけてしまうのが、雨の日”

相手が基本的にこころが健やかなときは、晴れの日心理学でよい。多くの場合、これで対応できる。でも、相手がこころの具合が悪い時、病んでいるときは、雨の日の心理学が必要。雨の日の心理学、晴れの日心理学、とは著者の造語。著者はカウンセリングルームを主宰する臨床心理士に。

この区別が理解されていないばかりに、ケアをする人もつらい思いをすることがある。と、図らずも雨の日のケアに巻き込まれた筆者は、大いに納得する。

この本は、雨の日の相手に対する、聞く技術やおせっかいの技術など、方法論を教えてくれる。かといって、劇的に脱出できず方法論が書かれているわけではない。

でも、まずは、晴れの日、雨の日が、別物であり、対応方法が違う、ということを知りやすく示してくれたことに、この本の一番の意義があると思う。

### ● 角田 季美枝

## 1◆ 野村育世 (2025) 『蜘蛛 なぜ神で賢者で女なのか』講談社選書メチエ、講談社 四六判並製、320 ページ、2,700 円+税、ISBN9784065395509

著者の野村育世さんは日本中世史の研究者であり、蜘蛛が大好きで東京蜘蛛談話会の会員。本書の構想じたいは 30 年前にあったとのことだ。蜘蛛の生物学的紹介を詳細にふまえて、古今東西・内外の蜘蛛にまつわる文化（神話、文学、妖怪、民俗、アートなど）を紹介している。

蜘蛛は、見る側の心の状態によって、恐ろしくも醜くも見えるが、生態や姿の何かが人に強い印象

を残す存在で、時代によって、ある時は崇め、愛で、ある時は恐怖や嫌悪を感じさせる、それが人によって「美」たりうる条件を備えていること、と結論づけている。また、現代の問題は、無感情にただのモノとして蜘蛛を殺す、そういう人が登場していることという。そのような例として、谷崎潤一郎の『細雪』に登場する、無感情に蜘蛛を殺す男性を紹介している。無感情に蜘蛛をモノとして殺すという価値観について、「この人々にとって、蜘蛛は神でも鬼でもなく、ただの迷惑なモノ、物体に過ぎないのだ。だから、その生命に対して何ら関心を払うことなく、無感動に殺してしまって平気なのだ。このような蜘蛛観は、近現代に新しく登場したものと思われる。この蜘蛛観がこれまでと違うのは、何も生み出さないということだ。何の文化を生み出さない、不毛な蜘蛛観なのだ。」(p.291)と断言している。

私のまわりでは、虫嫌い(少年・少女時に虫とりして遊んでいても)、住まいのまわりの緑地をいわれなければ緑地として認知していない若者が多い。モノとしてとらえられているのは蜘蛛だけなのだろうか。

「蜘蛛を殺さない」という伝統的な価値観を非科学的というなら、生命ある蜘蛛をモノとして無感動に殺すことだって十分に非科学的だと著者はいう。蜘蛛も同じ地球に生きる仲間。そう感じる人が少なくなってしまったのはなぜだろう。近代の公衆衛生は、蜘蛛などを「害虫」と位置づけ、清潔観を教育している。「殺して当たり前」を進めると、地球の生態系はどうなるか。

本書を読むと、陳腐だが「蜘蛛ってすごい!」と驚かされる。絵本、古典文学、史料など文献を豊富に紹介しているので、関心をもったものを手にとって読んでみてはいかがだろう。

## 2◆ 中島岳志編(2025)『死者とテクノロジー』(RITA MAGAZINE 2) ミシマ社

B5 判変型並製、232 ページ、2,400 円+税、ISBN9784911226179

非常勤講師をしている大学で、数年前から樹木葬などの自然葬をひとつのトピックとして取り上げている。その関連で本書を手にとった。日本に限らず、葬儀に対する環境影響(土葬における有害物質による土壌汚染、火葬での温暖化ガス排出、墓地需要増加による土地不足など)が葬儀に関連した新たな技術開発を生み出していることを知る事ができる格好の 1 冊である。昨今の超スマート化社会の実現をめざす動向も併せて考えると、身体観、死生観を揺るがす技術の市場化が急速に進むだろうという印象をもつ。最近の手元供養品のバラエティーの中には生前の写真を使って 3D プリンタで立体化するというものなど、絶句するものもある(絶句しない人もいるだろうとも思うが)。亡くなった歌手を AI で「復活」させて楽しむことは、日本でも登場している。死者労働、死者所有という問題も出てきており、法制度が追いついていないとある。

編者の中島岳志さんは、巻頭論考「利他的な死者」で以下のように、本書のねらいを書いている。

「少子高齢化が進み、社会の多死化(高齢化後に死亡数が増加し、人口減少が加速する状態)が進行する中、死者との関係性の構築は、喫緊の課題といってよい。そのようななか、本書では「想起する力」を喚起するテクノロジーのあり方を探究し、その方向性を提示したい。そのことが死者を利他的な主体として浮上させ、自己責任論が蔓延する社会のあり方を、利他が循環する方向へと導く

ことにつながると確信している。」(p.18)

家族・親族と死者の関係は「利他」だけではないが、「利他的な死者を浮上」のために参考になる論考や座談会が収録されている。関心のある方はぜひ手にしてほしい。

### 3◆ 野間秀樹(2022)『K-POP 原論』HAZA

四六判並製、426 ページ、2,700 円+税、ISBN 9784910751016

昨年、日韓合同学術会議に報告者として招待された際、韓国の最近の文化状況などを知りたいと読んだのが、斎藤真理子(2024)『隣の国の人々と出会う 韓国語と日本語のあいだ』(シリーズ「あいだで考える」、創元社)だった。この本も非常にいいのだが、まだ自身の言葉で良さを説明できそうにない。そこで、その本で「韓国語と日本語のあいだをもっと考えるための作品案内」にあったなかで手にとおもしろかった、『K-POP 原論』を紹介したい。斎藤 2024 は『K-POP 原論』おすめの理由を「音楽と言語の関係、今という時代に K-POP がなぜ愛されているのかをこんなにスリリングに解き明かした本はほかにありません。選び抜かれた K-POP の YouTube 動画の QR コード 150 本が掲載され、一瞬で飛んですぐに聴けるのもすごい。」(p.153)と書いている。

近所の図書館にリクエストして手にしてまずびっくりしたのは、装丁である。ショッキングピンクにタイトル、著者名が影付きのうすめの黄色の文字という見た目からは、「軽めの POPカルチャー本? いや、そうではない。並製だが厚さが 2.5 センチ、3 種類の索引(事項別索引、アーティスト名索引、人名索引)、願望別推薦 MV リスト、参考文献が付いている(これらを合わせて 33 ページ!)。これはもはや専門書の様相である。「原論」を冠するだけに、教科書なのだ。歴史、言葉、音と光、映像など、多様な特徴が解説されている。

とはいえ、文章の語り口は、どちらかといえば、軽い。というよりは熱い。もっとも一方的な押し語りかというところでもなく、韓国の史実や技術の進展などの状況をおさえて簡潔に K-POP の時代背景も紹介している。ハングルにはカタカナの読みも付されていて非常に親切なつくりだ。そして著者の野間さんは言語学者、美術家であり、言語学の著作も多数あるほか、内外で 8 回の個展も開いている。したがって著者による本書の紹介は「はじめに」の冒頭の「本書は K-POP を <K-ART>として愉しみ尽くす本である。」(p.1)で言い尽くされており、それ以上の紹介は不要だろう。よって、以下は、紹介者の感想にすぎない。

私はいままで K-POP を聴いたことがなかったが、そういう者がいることを想定しているのか、まず体験せよと 4 本の動画を薦めている。4 本は、BTS の「血、汗、涙」(2016 年)、BLACKPINK 「DDU-DU DDU-DU」(2018 年)、BLACKPINK 「How You Like That」(2020 年)、MAMAMOO 「I Miss You」(2016 年)である。それ以外にもこの本を頼りにいろいろ YouTube 動画などを見聞きしたが(150 本の MV は 3 種類のベストランキングで分類されているのも便利)、同世代のボーイズグループ、ガールズグループがたくさんあり、同じグループのメンバーの顔や声の違いがわかるようになるまで、時間がかかっている(ファンによる動画の中には同じ曲でも日本語対訳があるもの、歌われた日時が違うものなど、非常に多くアップされているので驚きである)。

野間さんがくりかえし強調しているのは、「K-POP は戦争とは対極にある、戦争と最も距離が遠いアートのかたちだ」。それを実感するのに、私の人生の時間は足りるだろうか。本書のなかで紹介されている言語学的内容や芸術作品を、時間をつくって文字だけではない味わい方をしてみたい。

#### ◆ 向谷内生良 (2025) 『向谷地さん、幻覚妄想ってどうやって聞いたらいんですか?』

(シリーズ ケアをひらく) 医学書院、A5 判並製、296 ページ、2,000 円+税、ISBN 9784260061537

聞き手 白石正明(「ケアをひらく」担当編集)、特別寄稿 大澤真幸「〈知〉はいかにして〈真実〉の地位に就くのか?—当事者研究の奇蹟」

本書は、日本の(世界の?)「当事者研究」の最源流にいる向谷地生良(むかいやち・いくよし)さんへのインタビュー、生良さんの兄・妹も交えたインタビュー、そしてこれらのインタビューの内容もふまえた大澤真幸さんの論考で構成されている。インタビュアーは、医学書院の「ケアをひらく」シリーズの編集担当者の白石正明さん。このシリーズで向谷地さんがかかわる浦河べてるの家の著作は何冊が公刊されている。白石さんと向谷地さんとは『べてるの家の「被」援助論』(2002 年)の編集段階からのつきあいだ。

本書は、向谷地さんがなぜ当事者研究を始めたか、当事者研究の特徴といえる内容がどのような文脈で生まれたかについて、白石さんがうまく引き出す形でまとめている。向谷地さんの兄・妹も含めたインタビューも併せると、生良さんがうまれてからいままでの人生や家族について語っている。当事者研究の著作ではどちらかといえば、べてるの家の方法や運動論、そこにいる障害を持っている人たちが主人公だったが、本書では向谷地生良さんに光があたっている。とくに、兄・妹とのインタビューで、家族史も含めてそれぞれが語っており、それが本書のコアと思う。また、べてるの家の運営や当事者研究について、オープンダイアログ、精神医療などとの比較も含めて語られているので、当事者研究について知るための参考にもなる。

一方、大澤さんの特別寄稿(pp.211-269)は、「発話」「発話方法」を切り口に、向谷地さんのアプローチを分析しており、言語によるコミュニケーション論の研究もふまえて、医療者の患者への発話に潜む「隠れた支配」という力があることを説き、当事者研究で語られるやりとりの特徴をまとめている。

精神障害をもつ人びとと医療、福祉、介護にかかわる人、また障害を持つ人の家族にとって、当事者研究という考え方を知るには、分量があるが、大澤さんの論考以外は非常に読みやすい。分量を気にせずページを繰っていけるだろう。精神医療や福祉の世界が当事者研究の影響を受けて変わりつつあるのも理解しやすい。一番変わらないのが家族なのかもしれないという指摘もリアルだ。そのようになってしまうのも、それを家族に無意識に強いている社会がまだあるからだろう。自己責任論に加えて家族責任論にしている社会は、日本で現在も進行中である。

現在の社会で支配—被支配の関係は、親(大人)—子ども、男性—女性、教員—児童・生徒・学生、専門家—素人、富裕層—貧困層などいろいろあるが、支配の側の発話を被支配の側がどう乗り越えられるのかという点でも参考になる。被支配といわれる側の言葉の修得や被支配といわれる側

の言葉を支配しない言葉で考えることが必要。という意味で、言葉の修得が関係を変えるカギである。それが大澤さんの論考の要点と思う。

## ● 桑垣 豊

### ◆「ETV特集 駅が語れば 100年の物語」

NHK教育放送 2025年11月15日(土) 23:00~23:59

私が抜海(ばっかい)駅で下車しようと思ったのは、その前日のことでした。1987年の国鉄民営化直後です。前日天北線の浜頓別(はまとんべつ)駅近くに泊まった私は、一度、音威子府(おといねっぶ)駅に戻り、宗谷本線に乗り換えて稚内をめざすことにしました。帰りに天北線経由で旭川方面に戻るつもりだったので、行きに宗谷本線に乗ることにしたのです。しかし、稚内に早く着きすぎるので、どこかで途中下車しようと思いました。それが抜海駅でした。駅の名前も初めて知りました。



地図を見ると、海が近く、少し離れているけど歩いて行けるとところに漁港の村があります。次の各駅停車が来るまで2時間ちょっとくらいあって、ちょうどいい。駅を降りて西の方角に歩いて突き当たりまで行きましたが、海岸砂丘に木がはえていて海に近寄れません。左に曲がって漁港をめざしてしばらく歩くと、軽トラックが後ろから近づいて来ました。乗りませんかと誘われたので、漁港まで乗せてもらいました。漁港での滞在時間が増えたので、海が見えるところまで歩いて行くと、円錐形のごく低い小山が見えてきました。オホーツク文化の遺跡だと、説明に書いてあります。沖合には、利尻島が見えます。この海は日本海ですが、宗谷岬を回りこんだ反対側のオホーツク文化がここまでおよんでいたとあります。オホーツク文化は、アイヌとはまた別の文化です。帰りは歩きました。

その駅がなくなったというのが、この番組の内容です。番組の最後に、100年続いた駅舎を壊すシーンがありました。雪国なので、ほっておくと冬には雪の重みで崩壊するので、雪かきが必要です。保存コストをかけたくないのでしょう。そうやって、日本最北の無人駅は、放送の年の春になくなりました。

#### 【地図の説明】

点線は廃線になった路線です。天北(てんぼく)線は、ずっと早く民営化後しばらくで廃線になりました。民営化直前に廃線になった羽幌(はぼろ)線は、旅行のはじめのほうで幌延まで乗りましたが、抜海に向かったときは廃線になっていました。廃線間近の羽幌駅がテレビのニュースで流れて、私が映っていたと母から聞きました。

### 1◆ 『二関節筋の協調制御理論 重力が育てた運動制御のメカニズム』

熊本水頼(みなより) 医学書院 2021 年

人間のからだでは、肩とひじをつなぐ筋肉が二関節筋になっています。この筋肉が縮むと、肩関節とひじ関節が同時に回転します。肩とひじの間には、肩関節だけ回転させる筋と、ひじ関節だけ回転させる筋もあり、3つの筋があることとなります。ただし、筋は縮むことはできても推すことはできないので、3つの筋の反対側それぞれに筋があり、合計6つの筋が腕を動かします。足の筋も同じです。

この著者が唱えるまで、肩とひじをそれぞれ回転させる筋だけで、腕の運動を制御していることになっていました。そして、ロボットでも同じく別々にモーターで回転させて、連携させるための制御を別にもうけています。しかし、二関節筋があれば自動的に連動させることができます。制御対象が増えて複雑になっているように見えても、制御はしやすいのです。

このことにだれも気が付かなかったのは、死んだ生物の解剖所見だけで、筋肉の働きを考えてきたからだと言います。小学校の教科書から大学の医学の専門書まで、間違った説明をしています。その応用のロボット工学は、今も二関節筋制御を取り入れようとしない。世界的に。熊本先生が積極的に学会で説明して、若い人が協力しているにもかかわらず。

今までの路線より進んだ考えが出て来ても、無視するというのは、経済学と似て、地球人の頭が固さがよくあらわれています。へたに応用が進むと、ロボット兵器を進歩させてしまうので、これでもいいのかも知れませんが。

### 2◆ 『復刊 対話・微分積分学』

笠原皓司(こうじ) 現代数学社 2006 年(初版 1978 年)

数学の内容を教科書形式でやさしく書いても、限界があります。そこで、架空の北井先生と学生が対話する形で、微分積分の話が進みます。学生が「こういうことですか」と聞くと、北井先生が「そうじゃなくてこうです」と答える感じで話が進みます。それでも、数学がよく理解できるとは限りませんが、気楽に読み進められます。数学を知っている人も、知らなかった側面が見えてきます。私の市民研連載対話編の参考にしました。

全編対話形式の数学の本は、1978 年のこの本が初めてかも知れません。2024 年にも増刷が出て、著者が一言書いています。数学が苦手な人も、ぜひ、ご一読を。

### 3◆ 『四色問題 どう解かれ何をもたらしたのか』

一松信(ひとつまつ・しん) 講談社ブルーバックス 1969 2016 年

1976 年、四色問題が解決して、四色定理となりました。平面に境界で区切った領域があって、最低何色で塗分けられるか。恐らく四色であると予想できましたが、それをイリノイ大学のアッベルとハーケンが証明しました。小学生でもわかる地図の塗分けが、意外にむずかしく、予想もしない方法で解決したのです。あらゆる可能性を確かめるには、場合の数が多すぎて人間には無理で、コンピュータの力でようやく証明できました。

この本は、証明から2年後の1978年に出ましたが、40年後証明に至る歴史を調べなおして、定説をくつがえす発見をまじえながら説明しています。奇しくも、笠原先生の本と同じ年に初版が出て、今も読み継がれているところが共通しています。ところで、手元にある2016年版第1刷のカラー口絵1頁め「ムーアの地図」には、ミスがあります。ムーアでなくて、編集部ミスです。さて、どこでしょう。

一松先生は、多くの数学解説書を書かれていて、事典類の編集・監修も数知れません。ご高齢ですが、「数学セミナー」にときどき小文を寄せられています。戦時中東大生として、陸軍暗号研究にも参加されていたようです。ちなみに、日本陸軍の暗号は、アメリカには解読できませんでした。

#### ◆1つの駅と3冊の本◆

実は、3冊の本の著者は、父の知り合いです。2017年の父の葬式に、みなさん高齢にもかかわらず参列していただきました。一松先生はご存命ですが、熊本先生と笠原先生は2025年に亡くなられました。抜海駅の廃止も2025年。抜海駅と熊本先生、笠原先生の著書は、追悼文として書かせていただきました。どうしも取り上げたかったので、4つの作品とさせていただきます。

笠原先生と一松先生は、数学者としての父の昔からの知り合いです。笠原先生と父は、大学の教科書の共著があります。培風館から出た微分積分学、微分方程式、線型代数学の3冊の演習の本です。笠原先生にはこのほかにも、50年にもおよぶ単著でロングセラーの微分積分学の教科書（サイエンス社）もあります。熊本先生は、舞鶴の海軍機関学校で教官をしていた父の教え子です。3人を先生と書いたのは、父と話すときに私はいつも先生と呼んでいたからです。父は年上だったので、君づけで呼んでいました。

## ● 白井 基夫

### 1◆前間孝則／岩野 裕一 著『日本のピアノ100年 ピアノづくりに賭けた人々』 草思社文庫 2019年

プロローグは「グレン・グールドのピアノ」であり、最初から引き込まれた。半分くらいまでくると時代は昭和初期、戦争の時代の背景もよく書かれていた。

知らない逸話が満載。たとえば、日本を代表するピアニストだった園田高弘の、コンサート用グランドピアノ開発に対する貢献。また、1950年代後半、ケンプ、ギレリス、ロストロポーヴィチ、ザンデルリンクといった一流音楽家を使ったイメージ戦略の展開。そして、いちばんびっくりしたのは、リヒテルとヤマハCFとの出会い、彼の初来日、大阪万博、フェスティバルホール。彼は何も言わなかったが、彼が使ったピアノの鍵盤は鮮血に染まっていた。

しかし何より、日本のピアノ製作史の前にある、明治・大正期のオルガンづくりに取り組んだヤマハ創業者・山葉寅楠たち職人の悪戦苦闘の記述は感動的。この歴史が学校での音楽の授業に影響を与え、日本人が西洋音楽に接近する契機となったのだった。

オルガン開発史・製作史こそ、実は本書の読みどころかもしれない。一方で、ピアノ教室に通ったことがある人は、高度経済成長期前後を読むと「なるほど」と思うのでは。

なお、よく知られていることだが、カワイの創業者・河合小市は山葉寅楠の弟子だった。私見だが、長いこと、カワイのピアノは総じて軽い音で「？」と感じていたが、「Shigeru Kawai」ブランドはすばらしいと思う。滋は小市の次女と結婚して河合姓になった、河合楽器製作所 2 代目社長。

## 2◆ フジュレ・ド・モンブロン 作 福井寧 訳 『修繕屋マルゴ (他二編)』

幻戯書房(ルリユール叢書)2021年

最初は、19世紀の作品だと思って読んでいた。この作家はとんでもない、1748年にはこれを出版しようとした。

音楽史でいえば、まだ大バッハが生きていた時代。科学的手法を政治に持ち込んだニコラ・ド・コンドルセ(数学者・思想家・政治家)は生まれたばかり。その時代に、聖職者や高級官吏の下世話さを、徹底的に揶揄したり皮肉ったりしている作品を世に出そうとしていた。性的表現も多く、発禁は当然の内容と思われる。

登場する地位の高い男どもはみんな醜悪で、作家が低い身分の出なら、往々にして強烈な嫉妬や憎悪の感情が表出してきて鼻につく。ところがこの作品には、そういうものが出てこない。主人公はただただ、裕福な暮らしを追求するためだけに冷徹な思考をもつ、究極の「実務家」娼婦なのだった。

彼女が世をみる眼力には、余裕さえ感じた。つまり彼女は、宗教や家族関係などのしがらみから根本的に自由であり、権力関係や権威は徹底的に利用する立場だった。いちばん大きいのは、繰り返すが、嫉妬や憎悪からも自由という点ではないか。

この作品から約250年後、1984年に発表されたデュラス『愛人/ラマン』の主人公「わたし(少女)」も、同じように「実務家」だった。中国人の青年を愛人にするべく、はかったのだ。

特に情愛ものでのフランス人作家の特徴というものがあると考えている。ドイツ人でも、イタリア人でも、当然、英国人でもありえないような。

## 3◆ ベンハミン・ラバトウツ 作 松本健二 訳 『恐るべき緑』

白水社2024年

読みはじめて、これは小説だと思っていたのは間違いかと思った。科学ノンフィクションではないか、と。これはそんな実在した／実在するらしい、サイエンス方面の研究者をめぐる物語。一種の評伝。

登場人物は、フリッツ・ハーバー、カール・シュヴァルツシルト、望月新一、アレクサンダー・グロタンディーク、ヴェルナー・ハイゼンベルク、エルヴィン・シュレーディンガー。知っていた名前は、ハイゼンベルクとシュレーディンガーだけだった。

望月新一についても、「も」の字も聞いたことなく。Wikipediaを参照したら、確かに実在の数学者で、「メディアの取材に応じない意向を示しており、ABC予想に関する論文の学術誌掲載決定に

際する京都大学の会見にも出席しなかった」という逸話も載っていた。

章立ては、以下のとおり。

プルシアン・ブルー

シュヴァルツシルトの特異点

核心中の核心

私たちが世界を理解しなくなったとき

エピローグ 夜の庭師

エピローグは完全なフィクションとのことだから安心だが、ほかはどこまでが作り話かわからない。そこがまた魅力なのだろう。その答えは、Google で AI が教えてくれる。ただし、少しは疑ってかかる必要はあるかも。

市民研メンバーのみなさん向けに取り上げてみた次第。興味があれば、具体的な内容を Google で調べてみてください。

## ● 林 浩二

### 1◆ 第 55 回特別展「貝に沼る ―日本の貝類学研究 300 年史―」

大阪市立自然史博物館(大阪市東住吉区)

2025 年 2 月 22 日(土)～ 5 月 6 日(火・祝)

<https://omnh.jp/tokuten/2025shells/>

展示室内のレイアウトはキッズマップ

(<https://omnh.jp/tokuten/2025shells/assets/pdf/kidsmap.pdf>)でわかる。

関西での 300 年前からの貝類マニアの話から、現代にいたるまで、とにかく幅広く取り上げられていることに感心した。多くの観覧者が一つ一つの展示をじっくり見ている。

貝類をテーマに、オタクという個人の趣味・モノ集めが自然史科学に発展してきたこと、今後も続いていくことが実感できる展示となっている。国内ではまだ少数の自然史資料として文化財(大阪府指定)に指定されている木村蒹葭堂貝石標本から、現役の貝類研究者の道具紹介、最新の研究手法解説、果てはスーパーマーケットで販売されている食用貝類までが並ぶ。探究の結果としての標本だけの展示ではなく、今も多くの市民を含む研究者による探究のプロセスを示し、子どもを含む観覧者を貝類研究へといざなう展示となっている。この方向性は、同館の展示で一貫して示されている。

私見では、「沼(ぬま)る」というオタク文化に語源を持つ新語を使ったタイトルに抵抗がいくらかあるが、惹きつけられる人もいたはずだ。

展示解説書(<https://omnh-shop.ocnk.net/product/2089>)は売り切れたので、図書館・博物館等で探す必要がある。

## 2◆ みんなく創設 50 周年記念特別展「民具のミカタ博覧会—見つけて、みつめて、知恵の素」

国立民族学博物館（大阪府吹田市）

2025 年 3 月 20 日（木・祝）～ 6 月 3 日（火）

プレスリリース：[https://www.minpaku.ac.jp/wp-content/uploads/20250203\\_press02.pdf](https://www.minpaku.ac.jp/wp-content/uploads/20250203_press02.pdf)

国立民族学博物館（以下、民博）と武蔵野美術大学のコレクションを組み合わせた、とてもユニークな展示だった。

2025 年夏には、大阪市夢洲（ゆめしま）で、大阪・関西万国博覧会が開催された。この展示では、55 年前の 1970 年大阪万国博覧会（大阪府吹田市で開催）のために世界各国で収集された世界の民具（EEM コレクション、民博の設置・開設の柱となった資料）と、同時代に収集された武蔵野美術大学所蔵の日本の民具（ムサビ・コレクション）を「用途」「目的」でつなげて展示するという前半部分が特に印象深かった。思いつきだが、この展示室に、同様の／近い機能をもつ現代の物品を並べたらどうだろうか。

展示図録は在庫があり、通販でも購入可能。

<https://www.senri-f.or.jp/shop/products/detail/3501167>

参考：三澤麦(2025)「民具のミカタ博覧会—見つけて、みつめて、知恵の素」（国立民族学博物館）開幕レポート。生活から生まれた「知恵の素」を様々な視点で観察する。美術手帖（オンライン）2025.3.20

<https://bijutsutecho.com/magazine/news/report/30464>

## 3◆ 藤本壮介の建築：原初・未来・森

森美術館（東京都港区）

2025 年 7 月 2 日（水）～ 11 月 9 日（日）

<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/soufujimoto/>

藤本壮介（1971 年生）は 2025 年大阪・関西万博の「会場デザインプロデューサー」を務めた。

カリブ海のセントクリストファー・ネイビス国に駐在したことがある友人が、2025 年 8 月 20 日の同国の「ナショナル・デー」に招待され、わたしもそのイベントに誘われたので 2025 年大阪・関西万博に行ってみた。個別のパビリオンの予約はせず、多数の国のパビリオン（展示コーナー）からなるコモンズ館（A・B・C・D・F）を一通り回ると共に、世界最大級の木像建築物ということで大いに話題になっていた「大屋根リング」（一周約 2km）を一周し、リング上から大阪湾に沈む夕陽を見た。釘などはつかわず、木組みを元にできた巨大な構造物には驚ろかされた。関東に戻ってから、森美術館でのこの展示を見ることができた。

展示室では、大屋根リングの一部の 5 分の 1 模型、木組みを補強する（今回は金属の）「くさび」の実物も展示されていた。特に注目したのは万博会場全体の空間配置デザインが素案から確定に至るまで手描きイラストの複製が多数展示されたコーナー。最終案に至るまで、スタッフと議論を重ね、アイデアを共有しながら最終形にいたった経緯の一端がわかり、とても面白く感じた。

藤本壮介へのロングインタビュー動画が、いくつものコーナーで視聴できるようになっていて、多く

の観覧者がしっかり見ていた。

これまで建築の展示はいくつも見たが、建築に詳しくないわたしにとっては最も面白い展示の一つだったと思う。

展示風景写真は flicker で公開されている。

<https://www.flickr.com/photos/moriartmuseum/albums/72177720327758468/>

展示カタログは通販でも購入できる。

<https://shop.mori.art.museum/view/item/000000000678>

## ● 倉本 宣

### 1◆ 小堂朋美 持続的な里山づくり入門 -ボランティアからコミュニティビジネスへ 104 ページ 大阪公立大学出版会 (20250630)

本書では、1980 年代から大阪府南部の民有地で活動が続けてきた里山倶楽部を「山林所有者、ボランティア市民、補助金提供者である行政、仲介役の NPO の4者間の win/win の関係の成り立ちを資金循環で」詳細に捉えている。里山がかつてのようにそれ自体の経済によっては成り立たない現在において、里山倶楽部が 1 年間に動かしている 1000 万円を超える資金の額と内訳が参考になった。黒川農場自然生態園を主なフィールドとして、毎月 1 回の社会人講座「里山の未来を拓く」を年度の後半に開催しているものの、受講料収入は 60 万円に過ぎない。大学農場という場は位置づけが決まっているので、里山倶楽部に規模でも期間でも追いつくのはなかなかおぼろしい。

### 2◆ 岡田航 里山と地域社会の環境史—多摩ニュータウンにおける社会変動とく根ざしなおし 272 ページ 新曜社 (20250228)

江戸時代から現代までの八王子市堀之内の里山と地域の環境史が、里山との暮らしを維持し続けてきた住民の視点から書かれている。堀之内は多摩ニュータウンの一部で、1 で述べた黒川農場は多摩ニュータウンに隣接した神奈川県川崎市に位置する。黒川農場のある黒川上地区は農業振興地域に指定されていて、農業従事者以外の住宅建築ができないため、子どもの数が減っている。これまでは著者のようにていねいに住民と付き合いながら学ぶことができなかった。それには八王子市と川崎市の農政の規模や視野の違いも関わっているように思われる。川崎市の農業はごくせまい。黒川農場自然生態園が黒川上地区にできることを考えるべきだと、昨年度の受講生に指摘されて、この 1 年間はできるだけ広い範囲を歩き回った。

### 3◆ 矢原徹一・佐藤広行・布施健吾・田金秀一郎新種候補植物図鑑速報版 1・2: Volume 1: Acer to Hydrangea 169 ページ 九州オープンユニバーシティ出版部 (20240502)

現在においては、私立大学の方が教員の処遇や研究設備が劣るということはない。ただし、どうしようもないのが、研究室の面積である。30 年間勤務した私立大学を定年退職するときに近づき、封鎖していたドアを開けたら、この本が床に落ちた。注文したのに、来ないと思っていた本だった。

50 年前の分類学野外実習以来、図鑑に合わせて、植物の種名をみつけるという逆立ちした調べ方を続けてきたような気がする。紹介文には、「図鑑に載っていない植物が、日本にはたくさんあります。この速報版を出版し、図鑑に載っていない植物の識別点を紹介することで、これらの植物の新産地が見つかることを期待しています。」とある。これから各地のレッドデータブックなども書き換えられていくことであろう。

## ● 野山 宗一郎

### 1: 無駄で人権侵害の公共事業や開発

#### 1.1 ◆「最新報告 混迷のリニア中央新幹線」榎田秀樹著 旬報社 2025.11

著者は、この書のエピローグで「リニア計画には6つの問題主体がある。JR 東海。自治体。メディア。国。司法。有識者。このうちどれか 1 つでもまっとうに機能していれば、リニア計画沿線で今日の混迷は起きていなかった。」という。

2025 年 1 月に亡くなった森永卓郎氏の「ザイム真理教」のなかに、「カルトと宗教の違いは、お布施の額の大小」という趣旨の「真理」が書かれている。ある知人は「情報の約95%はウソでできている」というが、ファクトチェックをすれば容易にわかる嘘が権力や権威によって世の中に公表され、メディアが批判せずに垂れ流し、多くの人に信じられている。

そのような明らかな嘘のひとつが、リニア中央新幹線の開業時期である。JR 東海は、リニア新幹線の開業時期を「2027 年」と長い間言い続けてきた。しかも、それを妨げるのは元静岡県知事だけだと。しかし、その嘘が通用しなくなったときに、「2034 年以降」と言い換え、今は「仮置きで 2035 年」、事業費も 11 兆円（7年間で2倍に膨らむ）と、「嘘の上塗り」ないしは「公約（膏薬）の貼り替え」を繰り返している。

多くのメディアはこの嘘を検証することなく垂れ流す。先の戦争末期の旧日本軍の「大本営発表」の状況と変わらない。多くの国民は、自国の勝利を信じ（たく）て熱狂し、メディアも煽り、泥沼の戦況から目を背け、思考停止。その先に本土空襲、終戦。今も同様で「裸の王様」だ。

また、スポンサーや商業主義もからむ。フリージャーナリストのルポ記事を掲載しないように出版社に圧力がかかるという。一方で、毎年、テレビ朝日でJR東海のPRのような番組が有名人を用いて放送される（「池上彰のどうなる!?!リニア新幹線 2026」2月8日(日) 放映、1時間 25分）。なお、一瞬に正鵠を射る風刺番組もある。NTV 2025.5.25 放映の「笑点」だ。【たい平「笑点メンバ

ー全員を乗せて未来の乗り物出発進行!」/昇太「出発進行!」/たい平(左右を見回して)「リニア新幹線が走るまで(に)はもうみんな死んじゃってるだろうな」/(拍手・爆笑)/一之輔「そんなにかかりますかね?」/たい平「だと思っよ」】(30秒)さて、このブラックジョーク的予言は「成就」するであろうか。

著者は、リニア沿線各地を足で取材して、小学生でも計算できる四則演算で、開業までに少なくともあと20年(2045年)以上を要することを実証している。事実を隠蔽することで、人や科学は欺けても、神・自然は欺けない。まさに、平和の時代の「戦場ジャーナリスト」の渾身のルポといえる。難を言えば、初心者がうんざりするほどに、これでもか、これでもか、と「不都合な真実」が記録されていることだ。しかし、これは著者の現地取材にもとづく事実の集積であり、記憶・伝承すべき「バイブル」である。

「まず、リニア中央新幹線事業の時間的・空間的全体像を知りたいければ、この本を読むべきである。すなわち、リニアがどのように企画され、工事が始められ、工事の過程でどのような問題点が指摘され、沿線各地で反対運動がどのように起きているかをレポートしている。次に、反対運動をしている住民やこれから起こそうとしている住民にとっては、自分が基礎的なことを知っているかを確認できるほかに、各地の問題や住民運動の広がりについてのデータベースとして大いに役に立つ。」(街道歩きオジサン、Amazon カスタマーレビュー)

## 1.2◆『南海トラフ地震の真実』小沢慧一著(東京新聞刊)2023.8

「静岡県から九州沖にかけての M8~9級の巨大地震が30年以内に「70~80%」の確率で発生するとされている南海トラフ地震。この数字を出すにあたり、政府や地震学者が特別な計算式を使い、全国の地震と同じ基準で算出すると20%程度だった確率を「水増し」したことを、地道な取材活動で明らかにした書である。

限られた防災予算の中で、「防災行政と表裏一体となって進む莫大な予算を得てきた地震学者が、行政側に言われるがまま科学的事実を伏せ、行政側の主張の根拠になる確率を算出した一。」このご都合主義の科学に対して、今の地震学の真実を知って防災に打ち込み、地震が来るとは思わなかったと後悔することのないように、実態を調査し世に伝えようとした記者魂の力作である。」、なお、令和6年能登半島地震は、2024.1.1に発生した。

## 1.3◆「ちいさいおうち」バージニア・リー・バートン文・絵 石井桃子訳 岩波書店 1965年

(原書は「The LITTLE HOUSE」by Virginia Lee Burton (1942))

対象年齢4・5歳からの絵本である。「しずかないなかに、ちいさいおうちがたっていました。やが

てどうろがで、高いビルがたち、まわりがにぎやかな町になるにつれて、ちいさいおうち、ひなぎくの花がさく丘をなつかしく思うのでした—」

2025.8.30 の「市民による外環道路問題連絡会・三鷹」主催の講演会『縮小社会の未来予測？ とめたらどうなる外環道路』のなかで、講師の浜矩子さんが、拡大社会が行き過ぎると起こることとして、絵本「ちいさいおうち」の悲劇を紹介した。

現在の東京の止まることを知らない一極集中の(乱)開発・再開発、環境破壊、それと連動する都市計画道路整備の実相を考えるのに参考になる。絵本では、ちいさいおうちは昔のようなよい環境の土地に引っ越していくのだが、高齢者や格差社会の底辺に取り残された者は……。

## 2:人権侵害

### ◆「武器としての国際人権 日本の貧困・報道・差別」藤田早苗著(集英社)2022.12

日本人の誤った人権意識に対して著者は「思いやり」と「人権」は別物だ」という。戦後 80 年、基本的人権を保障する日本国憲法の日本社会に、まだまだ多くの差別や偏見が残っている。日本は「選択的夫婦別姓」が認められてない世界で唯一の国であることはそのひとつだが、最も深刻な人権侵害である貧困、情報・表現の自由、男性の問題でもある女性の権利、入管問題など、差別の「デパート」状態だ。

著者は、国際人権条約などの国際基準や国際人権機関を使って、日本の人権侵害の現状を改善しようと行動されている。本書は、「教科書や専門書ではなく、一般の人が読んで国際人権について理解を深めるための書物」というよりも、実践に役立つ参考書である。

## 3:時代の転換期

### ◆「第三次世界大戦はもう始まっている」エマニュエル・トッド著 文春新書 2022.3

この書は、2022 年のロシアのウクライナ侵攻を受けての緊急出版とのことだが、かつての東西対立の冷戦の歴史の延長線で欧米の主張とロシアの主張を等距離で見ている。

2025 年は、第 2 次トランプ政権に世界が振り回された象徴的な年。Tariff Man (TACO だが) に西欧の価値観「法の支配」が揺さぶられ、長い歴史を持つ「力の支配」に戻りつつあるようだ。

この著者であるフランス人の歴史人口学者の物の見方(人口増減が一国の盛衰や世界の勢力図に大きく関与)が、世界の力関係の変化を大きな時間と空間で読み解くのに役立つ。

この「力の支配」する世界を理解するのに、日本の「戦国時代」も参考になるかも。

なお、歴史は韻を踏むと言われる。コロナ禍以後の世界や日本の変化は、単なる戦前回帰でなく、DX(AI など)も影響(社会的存在としての人間の退化?)しているだろう。

## ● 山口 直樹

## I ◆ 福島亮太『ウルトラマンと戦後サブカルチャーの風景』(Planets, 2018)

ゴジラ映画やウルトラマンシリーズなどの日本の特撮を学問的に論じた本は、実は意外に少ない。本書は、そのような数少ない書のひとつであり、ひとつの到達点を示している書といえるであろう。

本書の構成は以下の通り。

- 序章 「巨匠」の後のテレビドラマ
- 第一章 ウルトラマンシリーズを概観する
- 第二章 ヒーローと寓話の戦後文化簡略史—宣弘社から円谷へ
- 第三章 文化史における円谷英二
- 第四章 風景と怪獣
- 第五章 サブカルチャーにとって戦争とは何か
- 第六章 オタク・少年・教育
- 第七章 エフェクトの時代の迷宮

著者は、序章において自らの問題意識を

「そもそも、戦後日本のサブカルチャー史は特撮を抜きにしては十分に理解できないし、逆に特撮の意義を考えるには、戦中、戦後への文化史への目配りが欠かせない。だとすれば今のサブカルチャー研究に必要なのは、何よりもまず特撮と歴史のつながりを回復することではないか—文芸批評家の私が本書を書く背景にはそのような問題意識がある。」(6 頁)と書いている。

特撮を独立した分野として考察の対象にしなければならないというのは、私自身考えてきたことなのだが、改めて戦後日本のサブカルチャーを戦前、戦中とのつながりで考えることの重要性を強調しておきたい。

ウルトラマンシリーズという戦後の特撮テレビドラマを中心に論じているので、ウルトラシリーズのはじまった 1960 年代のこを中心軸とし、その前後の歴史が論じられる。

この時期は映画が、全盛期を過ぎ、テレビが映画に変わる存在として一般社会に普及しはじめた時期であった。ここでいう「巨匠」とは円谷英二のことだが、1960 年代の映画からテレビという流れのなかでその後の人材をつないだ人物として大島渚があげられている。

ウルトラシリーズの異色作でコンビを組むことになった佐々木守と実相寺昭雄は、大島がつないだ人材である。

改めて著者は本書が次の三つの視点から論じられるということを述べている。 「

- 〈1〉 昭和のウルトラマンシリーズはおよそ 15 年の放送期間の間にどのような変容を遂げたのか。戦後サブカルチャー史のなかでみたとき、それ以前のヒーローもののドラマと比べてどういう特色を持つのか。
- 〈2〉 生粋の技術者であった円谷英二は、戦前、戦中を通じていかに特撮と映画を結び付けたか。さらに、戦後の『ゴジラ』以降の特撮においてでてきた「怪獣」のもつ意味とはなにか。
- 〈3〉 特撮やアニメにとって戦争となにか。そして、ウルトラマンシリーズの受容環境も含めて戦後サブカルチャー全般を支えてきた「少年」の概念はいかに形成されてきたのか。」(16 頁)

本書でなされている興味深い指摘をいくつか紹介しておきたい。

第一章ではサブカルチャー研究においては、漫画、アニメ、ゲーム、JPOP、ネット文化などが主流であり、特撮はどちらかというマイナーな存在にとどめられてきたことを指摘する。

特撮について指摘しているのは、1960 年前後生まれの男性が圧倒的に多く、70 年代や 80 年代生まれの論者が少ないという点である。

ウルトラ Q、ウルトラマン、ウルトラセブン、帰ってきたウルトラマン、ウルトラマンエース、ウルトラマンエース、ウルトラマンレオの特徴がそれぞれ指摘され、その変遷がのべられる。

なかでも興味深い指摘は、ウルトラセブンが、冷戦構造下において「内面を発見」した物語であったという指摘である。

当時のウルトラセブンは、地球人と宇宙人の間でしばしば引き裂かれていたが、これは当時の冷戦という政治状況に由来するものであり、ウルトラシリーズの基本的コンセプトを考案した沖縄出身の脚本家、金城哲夫の抱えた矛盾や葛藤でもあった。ウルトラセブンの主人公のダンは、ウルトラマンのハヤタのような宇宙人のいれものではなく地球人のふりをしているウルトラセブン自身なのだ。そのためにウルトラセブンにはハヤタになかった「内面」が生じた。「内面性の芽生えたダン＝セブンは、組織と一体化しきることも科学技術を全面的に肯定することもできない。セブンは冷戦期を背景としつつ子供向けの特撮テレビ番組に「内面を発見」をもたらした画期的な作品だったのである」(28 頁)と書いている。

ウルトラセブンのもう一つの特徴は、ウルトラマンにみられた国際性が、さらに際立たせられており無国籍性が強調されているということである。登場人物の名前は、カタカナで語られ、日本的な意匠は、なるべく抑制されていた。

後半ではウルトラシリーズのみならず仮面ライダーも「ポスト万博の悪夢」をテーマとして論じられる。仮面ライダーは、中途半端な文学性を払しょくし、屈託のないわかりやすい活劇に舵を切ったことに子供向け特撮テレビ番組としての成功があると論じられる。そのメインライターは伊上勝で、彼はもともと宣弘社で『月光仮面』の脚本を書いていたりした人物であった。

本書には書いていないことだが、仮面ライダーの主人公、本郷猛(この名前は、山中峯太郎『アジアの曙』からとられたものである)が、生化学を専門とする科学者だという設定であったり、世界征服を企む悪の組織ショッカーの中にある科学者集団をはっきり描き出したことは、子供向け特撮番組のなかでは画期的なことだったといつてよいように思われる。

〈拙稿「仮面ライダーと市民科学」『市民科学通信』(第 57 号, 通巻 203 号)参照〉

第二章はウルトラマンシリーズの「前史」のサブカルチャーが、戦時下の「大東亜」の記憶と深くかかわっていることが論じられる。

その「前史」にあたるものとは『月光仮面』(1958—1959)『快傑ハリマオ』(1960—1961)といった宣弘社のヒーローもののドラマである。

これらのドラマ制作にかかわっていたのは、宣弘社である。

宣弘社は、もともと社長の小林利雄の指揮のもと戦戦直後にネオン、駅広告、街頭テレビ、ビル広告などを精力的に手掛けた広告会社だったが、特撮テレビドラマの制作にもかかわっていく。

『月光仮面』(1958—1959)『快傑ハリマオ』(1960—1961)も戦時下の「大東亜」の記憶と

かかわっており、どちらも東南アジアという地域が鍵となっている物語である。

そこには、帝国日本のオリエンタリズムや植民地支配といった「大東亜共栄圏」の亡霊を読み取ることができるとする。『シルバー仮面』や『アイアンキング』などの特撮番組も宣弘社は制作しているが、それ以降、特撮番組は制作していない。それに代わり円谷プロダクションでは、科学や宇宙をモチーフとしたウルトラマンシリーズが制作されていく。つまり宣弘社から円谷プロへの移行とは、アジアの喪失、あるいは忘却の過程といえるだろう。

1901年福島県須賀川に生まれた円谷英二は、枝正義郎と知り合ったことがきっかけで、天活(天然色活動写真)にはいり映像の技術者となっていく。

もともと円谷は、飛行機乗りにあこがれており、東宝では、航空教育映画を撮影していた。

それは戦時期の『ハワイマレー沖海戦』の航空機や『ゴジラ』(1954)の航空機や『空の怪獣ラドン』(1956)や『モスラ』(1961)の映像につながっている。

著者はここで「戦後の『ゴジラ』以降の特撮においてでてきた「怪獣」のもつ意味とはなにか。」という問いに対して「超現実的オブジェとしての怪獣」という答えを与えている。

すなわち「円谷プロの生んだ怪獣とは、人間でも動物でも妖怪でもなく産業的な環境と共生する戦後的な「敵」である。この新しい敵の来歴はどこにあるのだろうか。このことを考えるには、やはり美術史との関係が無視できない。」(202-203頁)と述べている。

『ウルトラQ』『ウルトラマン』『ウルトラセブン』で怪獣の造形にあたったのは、成田享(デザイン)と高山良策(造形)であった。高山の師にあたる1898年生まれ福沢一郎は、瀧口修三とともに日本にシュールリアリズムを導入した画家であった。横尾忠則などもこの流れに影響を受けており、近年「ゴジラとは何か」という展示でゴジラの絵を描いていた。

怪獣とは非現実的な存在ではなく、超現実な存在である。

市民科学研究室でゴジラについて語っていた時、「山口さん、ヴィジュアルを、ヴィジュアルを！」などと言ってくる人がいた。杉野実氏であった。

このヴィジュアルを問題にした人が本書で取り上げられている。

大伴昌司氏のことである。大伴昌司(本名は四至本豊治)は、戦前の国際ジャーナリストであった四至本八郎と婦人運動に参加していた四至本アイの長男として生まれていった。

彼は、児童雑誌において活躍し、『週刊少年マガジン』の巻頭特集を担当する。一連の特集は、怪獣、万博、空港、動物園、民俗学、戦争体験、劇画、紀元節、公害などを担当した。

またその仕事のなかでは、東宝映画やウルトラマンシリーズの怪獣の「図解」をのせた『図解怪獣図鑑』や『怪獣ウルトラ図鑑』『怪獣図解入門』など怪獣ブームを牽引した仕事として知られる。

この『図解怪獣図鑑』は、現天皇が母である美智子妃にねだったということでも知られる。

『図解怪獣図鑑』は子供向けの体裁をとりつつ、たとえ架空の怪獣を相手にするときでもジャーナリスティックな「本物らしさ」を装うことであった。

この姿勢の「前史」として父親のジャーナリスト四至本八郎の仕事が見逃せないという。

アメリカに17年滞在し、1929年の世界恐慌を目の当たりにし、「産業統制」というアメリカ史上まれにみる大実験を見た後その事情を日本に1933年に紹介した『頭脳トラスト』や『テクノクラ

シー』などの仕事がある。興味深いのは、大伴昌司もこの父親のテクノロジー志向を受け継いでいるという指摘がなされていることである。

政治の主導権を人間ではなくテクノロジーに政治家ではなく技術者に握らせること—この統治の機械化、技術化が「テクノクラシー」のねらいであった。(229 頁)

もうひとつ市民科学にとって重要な指摘は、大伴昌司が、『暮らしの手帖』の花森安治を意識していたというものである。実際、大伴昌司は、『料理の手帖』という『暮らしの手帖』のパロディというべきものを編集している。(市民科学研究室に「子供料理教室」があるのは、興味深い)円谷英二が、映像の技術者であるとするならば、花森安治は、生活の技術者とでもいうべき人であったが、大伴昌司が花森安治を意識していたという事実は市民科学にとって興味深いものと思われる。

本書の指摘によれば、「アメリカのレイ・ハリーハウゼンの仕事や『ゴジラ』や『モスラ』が示すように本来ならば子供向けのエンターテインメントに傾斜する必然性はない。にもかかわらず、日本の特撮の「精神」は「少年」を触媒にして成長し、ウルトラマンという不思議な巨人を打ち出すに至った。この子供との共生にこそ日本の特撮ひいては日本のサブカルチャーの特性がある」(267 頁)という。現在は AI によって簡単に特撮(トリック)動画が作れるようになってきているが、重要で興味深い指摘を多く含んだ本書は、日本の特撮(技術)の歴史を考えると、必ず参照されるべきものであると思われる。「大衆文化と科学」といったテーマに関心ある人には面白く読める本ではないかと思う。

## 2◆ 古畑康雄『精日—加速度化する日本化する中国人』(講談社+α新書 2019)

1989 年の天安門事件やソ連や東欧諸国の社会主義国の崩壊により中国共産党は、政権における執政責任を問われる危機に陥った。

そこで、こうした事態を共産党書記長になった江沢民は、愛国主義というナショナリズムを鼓舞することによって、政権の権力基盤強化を図ろうとした。

その時に持ち出されたのが、抗日戦争、すなわち日中戦争であった。

抗日戦争は、正義の戦争であり、中国人民を抗日戦争において勝利に導いたのは、中国共産党だったという物語=歴史が、作り上げられることになった。これは現代中国で粗製乱造されている荒唐無稽な抗日戦争ドラマにおいて顕著である。(実際には日本軍に主に立ち向かっていたのは、中国共産党軍というよりむしろ国民党軍の方であったのだが。)

著名な日中関係の研究者であるエズラ・ボーゲルは、朝日新聞のインタビュー(2018 年 4 月)で、冷え切った日中関係が好転する可能性があるかという質問に対し、「中国が「反日」というカードを捨てるとは思いません。中国国民を一致団結させるのに非常に有効だからです」と指摘していた。この行き過ぎた「反日」を超えてさらに 2010 年代から中国共産党が、使い始めたのが「精日」という聞きなれない言葉である。

本書、古畑康雄『精日—加速度化する日本化する中国人』(講談社+α新書 2019)によれば「精日とは「精神日本人」の略で、現代中国では、「非国民」「売国奴」といったような意味がある言葉であるという。

中国の検索サイト百度には「精日」について以下のように書かれていることがこの本の 26 頁と 27 頁で紹介されている。

「「精日」とは精神日本人の略で、極端に日本軍国主義を崇拜し、自らの民族を恨み、精神的に軍国主義の日本人と自らを同一視する非日本国籍の人々をさす。その特徴的な行動としては、第二次世界大戦時の日本軍の軍服を熱愛し、日本軍の侵略を記念する遺跡で写真を撮影し、抗日の英雄を侮蔑するなどがある。このような人々は中国や韓国に分布し、知識レベルの低い若者が主体であり、「日雑(日本雑種)」とも呼ばれる。「精日」は日本軍国主義に熱狂するという明らかな特徴があり、他国への興味を自分の国家や民族に対する侮辱や冒涇の上に築いている」

著者の古畑は、「「精日」という言葉を生むきっかけになったのは、2017 年 8 月 4 人の中国人の若者が、第二次世界大戦当時の日本軍の軍服姿で上海の有名な抗日戦争遺跡、四行倉庫で記念写真を撮影し、この写真が中国の SNS で公開されるという出来事だった」(28 頁)と紹介している。

また 2018 年 2 月、二人の男性が、日本軍の軍服を着て江蘇省南京市の紫金山の抗日守備軍トーチカの前で記念撮影を行った。このことが微博で明らかになるとネットで批判の声が高まり、二人は逮捕されたという。(30 頁)

ここから日本軍国主義を賛美する中国人を「精日」と呼ぶことが始まったようだ。

そして「精日」のほとんどは 20 代、30 代、40 代に集中している。

この本のなかで著者の古畑は、様々な「精日」を具体的に紹介しているのだが、日本軍国主義を極度に賛美したりするような「精日」は一人も紹介していない。

彼ら、彼女らは、日本文化とくに日本の漫画やアニメの愛好者であって、日本軍国主義の賛美者ではない。

2018 年 3 月の全国人民代表大会(全人代)において中国外相の王毅は、記者から「「精日」をどう思うか」と聞かれたとき、吐き捨てるように「中国人民的敗類」(集団の中の裏切者、墮落した者、人間のクズ)と述べたとされる。

しかし、これは中国共産党による一方的な決めつけと言わざるを得ない。

なぜこのようなことが起こってしまうのか。このことに関して古畑は次のように述べている。

「「精神日本人」を肯定することは共産党政権への否定的な見方を広げることになりかねません。このため、本来であれば決して悪い意味ではなかった「精日」をたまたま一部の過激な若者が行った軍服事件を利用して、マイナスイメージを持つ言葉に変えた。

その過程ではメディアをあげてのバッシングを行い、その解釈を無理やり変えていった。

そういう事実がわかります。」(41 頁)

これが当たっているとすれば、もともとの「精日」と中国共産党のいう「精日」にはその意味に大きなギャップがあることになる。

このように中国共産党が、「精日」の解釈を無理やり変えていったのは、「日本精神」とも通ずる日本的価値観への支持が、中国共産党の愛国イデオロギーや自らの統治を正当化する歴史観や中国共産党の正統性の否定につながりかねないからだろう。

この点で中国人民衆による興味深い文章が、本書で紹介されている。

それは、2018 年 3 月 11 日にネットに発表された「私は『精日』だが、『人間のクズ』ではない」という文章である。『人間のクズ』とは、王毅外相の「精日」をとらえた発言のことである。

この文章は、最近、中国で「精日」という言葉が、取りざたされることにふれつつ前述の百度の「精日」の解釈に驚いてしまったと告白する。

そして以下のように続ける。

「日本文化や日本精神の好きな人にやたらと「精日」のレッテルを貼る、ならば、日本のアニメが好きな中国の子供やオタクはどう生きていったらいいのか、日本語を学ぶ学生はどう生きていったらいいのか、中国の日本企業の中国人従業員はどうしたらいいのか。

それゆえ「精日」は「人間のクズ」というより、「精日」という言葉を発明した人こそ「人間のクズ」というべきだ。なぜなら彼らは、民族間の矛盾や国家間の対立を煽り、民衆の注意をそらそうとする恥知らずだからだ」(45 頁)

ドラえもんに関しては、この前段で次のように述べてもいる。

「日本のアニメ『ドラえもん』を見て、ドラえもんが表現する想像力や創造力の文化を好まない人がいるだろうか」(44 頁)

このことから言ってこの文章の著者はドラえもんに影響を受けた中国の民衆の一人といえそうだが、中国共産党の「精日」への反論としては、もっともなものではないだろうか。

2015 年、映画『STAND BY ME ドラえもん』が、中国大陸で公開された。

この興行収入は、2015 年 5 月 28 日初演当日 2708 万元(約 5 億円)、6 月 26 日(興行終了日)までの累計収入は 5.3 億元(約 106 億円)を記録した。これは、中国で公開されたアニメ映画の興行収入の最高記録に迫った。これは日本での収益を大幅に上回っているという。

この映画に関して「だまされるな。ドラえもんは、日本が中国に送り込んできたスパイだ」という批評がでていたが、これは、行き過ぎた「精日」の影響がみられる外的外れな評価であろう。

さすがにこの批評に中国にいる多くのドラえもんファンが反発したのは、当然といえば当然である。中国共産党のいう「精日」(反日本文化)が、おかしいことに、中国の民衆は、気が付いている。

日本側にも問題はあがるが、中国共産党が、こうした文化政策をとり続ける限り、日中文化交流がうまくいくとは思われない。漫画やアニメなどの動漫画文化は、究極的には民衆のものであって官のものではない。

日本と中国の民衆を主体にした文化交流が求められている。

先にあげた古畑康雄『精日—加速度的に日本化する中国人』(講談社+α新書 2019)の帯には「日本文化が共産党を圧倒!?対日好感度も急上昇で 5 年後の日中関係は激変」という言葉が載せてある。これは著者ではなく編集者による言葉であろうと思われる。

しかし、この本が出された、2019 年から 5 年たった 2024 年言論 NPO の調査によるならば、前年、日本に対しては、「どちらかといえばよい印象を持っている」という人が、37%だったのが、12.3%に大幅に減り、「どちらかというともよい印象を持っていない」という人が、前年 62.9%から 87.7%に増えている。現実には、対日好感度が急上昇で日中関係が改善されるという予想とは、違った数字が出ているといわなければならない。日本でも中国でもほぼ 9 割の人が、相手国による印象をもっていないという史上最悪の日中関係という結果が出ているのである。

たしかに現代中国でドラえもん好きの中国人民衆が増え、大きな影響力を持つにいたっていることは事実だが、中国共産党の愛国主義的政策(反日本文化政策)によってこの日本動漫の影響力は封じ込められているというべきだ。同じ中国人個人のなかで日本動漫を愛好する趣味と「反日感情」は矛盾なく同居している。いまでもネットで日本の動漫について中国人が、意見表明するときには、実名ではできないという状況がある。この中国共産党の文化政策が変わらない限り、日中関係が、劇的によくなるということは、ないだろう。

また、国産の動漫作品の制作に力を入れている中国側から日本の青年層を引き付けるような動漫が、現時点では私の見る限り見当たらないということも動漫文化に関する日中間の双方向的でない一方的な関心のあり方を生んでいる原因であるように思われる。

本書は、中国共産党の正統性の起源が、抗日戦争にあることを示し、それが現代中国の文化政策にどのような影響をもたらしているのかを示している貴重な書といえるだろう。

### 3◆ 駒込武『統治される大学—知の囲い込みと民主主義の解体』(地平社, 2024)

本書のまえがきは、次の言葉からはじまる。

「学問は戦争の武器ではない。学問は商売の道具ではない。学問は権力の道具ではない。

生きる場所と考える自由を守り、創るために、私たちはまず思い上がった権力にくさびを打ち込まなくてはならない」  
学問を戦争の武器にし、商売の道具にし、権力の道具にしようとする者たちへの抵抗の宣言であらう。

本書の構成は以下の通り。

第一部 囲い込まれる有用の知—日本学術会議法・国立大学法人法・国際卓越研究大学法

第 1 章 「研究動員」の始まり—日本学術会議問題と京大滝川事件

第 2 章 私物化される大学

第 3 章 民主主義の解体・大学の解体—国際卓越研究大学法を貫く統治理性

第 4 章 産官学連携の同時代史—「イノベーション・エコシステム」という牢獄

第 5 章 ガバナンス崩壊への道のり—国立大学法人化法(2023 年)の隘路

第二部 根腐れする大学

第 1 章 京都大学でいま何が起きているのか

第 2 章 新自由主義に侵食される大学

第 3 章 労働の現場としての大学

第 4 章 京都大学の「植民地主義」を問う

第 5 章 「自由の風」が止むとき

第 6 章 大学ファンドに色めき立つ大学

補遺 大学「喪失」の時代における学問

2020 年菅義偉首相は、日本学術会議の会員候補者のうち 6 名の任命を拒否した。

日本学術会議法は、定員を 210 名としており、6 名の任命されないのは違法な状態を示している。

この日本学術会議への人事介入に対し、抗議した団体は、2021 年 2 月 5 日の時点で 923 団体にもものぼったという。学問の独立性を考えるととき大問題であることは言うまでもないことだろう。これに関連して 1933 年京都帝国大学で起こった滝川事件のことが述べられている。

滝川事件とは、1933 年 2 月 1 日、帝国議会衆議院予算委員会で宮沢喜一の父である宮沢裕議員が、「赤化議員」を免職にせよと文部大臣の鳩山一郎にせまった。そのなかに京都帝国大学教授の滝川幸辰が含まれていた。滝川は刑法の専門家の立場から治安維持法(1925 年)の批判をしたりしていたことのほかに台湾、朝鮮、中国の「被抑圧民族学生会」の顧問になりその会員である同志社女子専門学校の学生の写真を『刑法読本』に掲載したりしていた。

どれが決定的な原因かは断定できないが、滝川が体制にとって都合の悪い思想、学説をもっていることはたしかだった。

著者は、滝川事件における体制のねらいは「学問の自由」「大学の自治」を解体することにあつたと書いている。この滝川事件のあと天皇機関説事件(1935 年)矢内原忠雄辞職事件(1937 年)といった事件が起こっていく。さらに翌年の 1938 年には荒木貞夫が文部大臣に就任し、東京帝大をはじめとする帝大の総長選挙の廃止を要求し、東京帝大では「選挙」ではなく「推薦」という対応を強いられることになった。

そして「国家有用」とみなされる学説を説くものには、ポストと発表の機会が与えられた。また研究費も支給された。1939 年荒木文部大臣は、軍の威光を背景に科学研究費交付金の制度を創設し、一気に 300 万円の予算を計上した。

当初は、自然科学系の研究にだけ予算が計上されていたが、1943 年からは、人文研究にも研究費が配布されるようになった。

科学研究費の配分審査にあつたのは、1920 年代の諸学会の連絡調整機関として創設された学術研究会議(日本学術会議の前身)だった。

1949 年には、学術研究会議を改組して日本学術会議が発足した。

それから 70 年余りして日本学術会議への政府の人事介入という事件が起こった。

そして 2025 年 6 月国立大学法人化法案が国会を通過し、2026 年から施行されることになった。

この二つの事件に共通しているのは、政府が、特定の学者を選択的に排除した点であった。特定の個人を排除した理由があいまいな点も滝川事件とよく似ていた。

戦時下の「研究動員」がそうであったように産・官・学・軍連携体制のもとで大学における知は「国家有用」という方向に囲い込まれていく一方でこうした動きを批判的にとらえる人文知は、予算を削られポストも減らされていくことになる。

本書は、現代の大学が直面している様々な問題点を鋭い視点で描き出している。

明治期の帝国大学令には、「学者は国家に奉仕する」という文言はあっても「学者が市民に奉仕する」という文言はどこにもない。一体大学は誰のための大学なのか、ますます厳しさを増す状況の中で本書は、現代の大学を考えるためのヒントに満ちている。

## ● 上田 昌文

## I ◆『情報革命 400 年 顕微鏡からグーグルまで』(上、下)

(ケネス・カミール (Kenneth Cmiel) & ジョン・ダラム・ピーターズ (John Durham Peters) 著、  
鷲田祐一・監訳、吉森葉・訳、ニュートン新書、ニュートンプレス 2022 年:原著は 2020 年刊行)

このタイトルからあなたはどんな内容の書物を想像するだろうか。通信や制御に関わって、コンピュータやインターネットそして AI といった技術がどう誕生し発展してきたか、それが社会をどう変えてきたか、を思い描くのではないだろうか。ところが、この本はそうではないのだ。著者の一人(ピーターズ)は「日本語版へのはしがき」の冒頭でこう述べている(もともと原稿を書き進めていたカミールが 2006 年に脳腫瘍によって 51 歳で他界したため、ピーターズがそれを引き継ぎ原稿を完成させた。そのためこの「はしがき」は彼一人による執筆となった)。

「本書は脆弱性についての本である。(…)人間存在の脆弱性についても間接的に扱っている。(…)わたしたちの時代のコミュニケーションが立たされている窮地という、目に見えるテーマの裏には、人生の儚さという隠れたテーマがある。」

本書の原題は“Promiscuous Knowledge”(交雑する・無秩序な 知識)であり、事実・イメージ・知識に対する私たちの考え方を歴史的に検証し、「真実」の主張がどうゆらぎ複雑化していくかを論じた、「知識社会学」の側面も持つ本と言えるだろう。

私は 2025 年に読んだ本で、これほど要約しにくい本はないと思えるものをあえて紹介しているのだが、それは、17 世紀(これを著者たちは情報化時代の黎明期とみている)から現代(1970 年代が promiscuous な知識が増加した時期、1980 年代と 1990 年代はそれが本格化した時期とみている)までを扱うなかで、その時代によって「イメージ」「情報」「知識」「事実」「真実」—これらの 5 つの概念をあなたならどう区分けして関係づけるだろうか?—がどう生み出されたり、つかみとられたりしてきたのかを、それこそ promiscuous な領域から数多くの事例(科学哲学思想、写真、印刷文化、映画、テレビ、雑誌、博物館、学校、図書館、キュレーション、統計的サンプリング、絵画、ポストモダン建築……その多くは米国のもの)を持ち出して、時に息を呑むような鮮やかな切り口で読み解いていく面白さがあるからだ。

例えば、下巻の「爆弾と砲弾」(54 ページから 77 ページ)では原爆の「イメージ」の問題を取り上げているが、「米国の原子力委員会はこの新しい核科学を大衆に知ってもらうために、核爆発や爆弾の写真のなかから大衆にもわかりやすい見慣れたイメージを選びすぐって『Life』などの出版物に提供していた」「まるで原爆の開発が舞台上で行われているかのように、念入りにイメージが組み立てられ、切り取られていた」。その結果、「技術を見事に死と苦しみから切り離し、原爆と創造的な破壊が結びついた一つの神話をつくることに貢献した」ことを指摘している。そして写真技術は、じつはこのイメージづくりのみならず、核実験において必須の装置となり、さらに「超高速撮影は水素爆弾とセットで生まれた」(カメラと起爆装置は切り離せず、2~3 マイクロ秒刻みで写真を撮る必要があったから)ことにも言及している。また原爆・水爆のイメージは“エロスとタナトス”にも及ぶ。なんと、ビキニ環礁での核爆発の 3 日後には、性的なアピールを強調したあの新しいツーピ

ースの水着が「ビキニ」と名付けられることになったのだ。

高度に思弁的な部分などでは一著名な哲学者・思想家だけでも言及している数は 20 名を下らないだろう—まだ咀嚼できていない感じが残るものの、米国史を彩る様々なトピックが次々と繰り出されてきて、800 ページを一気に読ませる。

インターネットと検索エンジン、そして AI の普及によって、「知識」は加速度的・無差別的に拡散し、誰もが真実と虚構の区別ができない状況に陥る恐れを抱えている—このような時代の特質と由来を、多角的に読み解くことほど大切なことはなかなかないのではないか。平板な邦訳タイトル、地味な装丁の本なので、あまり売れたとは思えないのだが、隠れた名著だと私は思う。機会をみて、読書会という形で何人かの人と一緒に、日本の事例で検討しながら、改めて読んでみたい。

## 2◆「市民研サーチライト」(最新科学時事記事論文解説)で

### 閲覧し、紹介していきたいいくつかの英語圏の雑誌社・運動団体サイト

貧困、差別、抑圧、病苦、暴力、戦争……今、この世界で過酷な辛い状況におかれていて、最も救いの手を欲している人々は誰なのか。まがりなりにも安寧に暮らしていると言えるだろう者は、そのことに思いを馳せて、自分に何ができるか、何をなすべきかを、実際にはほぼ無力であるとしても、自身と社会に問い続けていかねばならない—人間としてまっとうな生き方を目指すなら、そのことを等閑に付すわけにはいかないだろう。「問い続ける」「見つめ続ける」ためには、「苦しんでいる人々の声を聞く(その状況を知る)」ことが前提になるわけだが、現在の主流のメディアではそれがなかなかかなわない、という印象を私は持っている。

私が休むことなく続けている「最新科学時事記事論文解説」も、じつは、主流メディアでは詳しくは取り上げない、苦しい状況に置かれた弱い立場の人々に目を向けた独自の取材や論説を、粘り強く展開している—それに挑む複数のジャーナリストや研究者をかかえる—いくつかの雑誌社や運動団体のサイトの情報を紹介したいからだ。これは他人のためというより、むしろ自分を叱咤して「見つめ続ける」ようにするためだと言える。

ここでは、恒常的に閲覧しているサイトのなかから、特に注目している 5 つを紹介する。もちろん、記事を拾う場合は、私は立場上“科学と社会”の観点から、ということになるが、どのサイトもそれでは括れない問題を多数扱っているし、“科学”に限っても、他にも社会問題に強く目を向けたサイトはまだまだまだたくさんある。あくまで私なりの first choice ということで受け止めてほしい。1 つ目を除いて、他は皆、主だった記事は無料で全文が読める。

#### ■New Internationalist <https://newint.org/about>

社会的公正・正義を追求する立場から社会・経済・政治・環境・ジェンダー・文化といった幅広い問題を扱う、英国では最大規模を誇る隔月刊の雑誌。市民科学研究室では『nature ダイジェスト』『MIT Technology Review』『日経サイエンス』の日本語の 3 つの月刊誌に加えて、この英文誌を購読している。2025 年 1・2 月号は「軍拡競争」、最新の 2026 年 1 月号はなんと「AI」を特集している。

■ **Mongabay** <https://news.mongabay.com/>

環境に関わる（地球規模の）緊急事態を報道し、行動を促すための独立系メディア組織。8 カ国の言語で発信し、ネットで結ばれた数百人のスタッフと 1000 人を超える地元ジャーナリストを擁している。動画による発信も多い。

■ **Current Affairs** <https://www.currentaffairs.org/>

資本主義批判の立場から、多彩で長大な（皮肉の効いた）エッセイを掲載するのが特徴。動物福祉に関しては特に力を入れている。

■ **U.S. Right to Know** <https://usrtk.org/>

健康、環境、食料システムを脅かす企業や政府の不正行為や失敗を調査し報告する米国の非営利団体。世界中の公衆衛生の学者、科学者、ジャーナリストと協力し、調査をすすめている。最近では、例えば「超加工食品」に関する専門的な調査を先導している。

■ **Public Citizen** <https://www.citizen.org/>

1971 年にラルフ・ネーダーによって設立され、今では全国に 100 万人の会員と支援者がいる消費者運動団体。大企業の不正を暴き、議会を監視し、規制機関に働きかける。最近では、データセンター問題で、報告書『REINING IN BIG TECH: Policy Solutions to Address the Data Center Buildout』を発刊している。

### 3◆ 2025 年（～最近）に出会った、英国、イタリア、韓国の女性の演奏家、作曲家の動画など

音楽を聴くこととお風呂に入ることは、心身のリフレッシュの面でとても似た効果がある。それもあって、この 2 つの行為をほぼ毎日欠かさないようにしている人は多いだろう。ただ、音楽がもたらすリフレッシュは、それが聴く者の情動・知性・精神にバランスよく作用する、という点で独特だと思える。もちろん、文学や絵画などを含めて、どの芸術もそうした作用を持っているが、聴き入っている間に自身の命の脈動が新たな勢いを得たような全身的な高揚を覚えることでは、やはり、私は音楽の力に及ぶものはないように思えるのだ。

私はしばしば、クラシック音楽を聴いて楽しむうえで、もっとも意義深い—つまり上記の“作用”の度合いを最も高めることのできる—楽しみ方は、自分の好みの作家の全集を通読するように、好みの作曲家のすべての作品を聴き通していくことだと言ってきた。背景となる（その作曲家が生きた時代の）政治や文化、創作の技法や表現の特性、音楽史のなかの位置づけ（様々な影響や関係の生成）……作品の演奏を今この瞬間に受け取るという生々しさ（情動）と、楽曲の構造的な把握（知性）と、楽曲から感受できる創作者の精神の営みのありよう（精神）とが一体になった経験が、そのことで得られるからだ。

そして、そうした経験をいくらか積んでくれば、時に、俯瞰的な聴き方をして、何世紀にも及ぶ数多くの作品たちの「再整理」をすることにも、また、独特の感興を覚えるようになるものだ。

2025 年に、読みながら聴き、聴きながら読むことで「再整理」の楽しい時間をもたらしてくれたのが、とにも ARTES（アルテスパブリッシング）から出た『**ナチュラル 自然と音楽**』（エマニュエル・レベル・著、西久美子・訳、2016）と『**「亡命」の音楽文化誌**』（エティエンヌ・バリリエ・著、

2018)だ。両者とも原著はフランス語だが、前者は音楽史に該博な知識を持つ気鋭の若手音楽学者の、後者は文学・音楽・絵画・思想史を縦横に駆け巡る小説家・評論家の、得難い作品だ(これまで同種のテーマの本があったかと言えば、じつはなかった)。ぜひクラシック音楽に関心のある方は一度図書館で手にとってみてほしい。両書とも後ろの索引を見て驚かされるだろう。

ここでは、直接に味わっていただけるように一上記 2 冊と関係はないが一、私が 2025 年に視聴して特に気に入った(最初のものだけ 2026 年 2 月)、女性たちによる創作と演奏のうち YouTube でも拾えるものを 5 つ挙げておく(関連する CD は私は主に NML(ナクソス・ミュージック・ライブラリ)で聴いたが、Apple Music や spotify でも聞けるものが多いだろう)。楽しんでみてください。

◆Ruby Hughes | Britten: Corpus Christi Carol · From 'Amidst the Shades'

<https://www.youtube.com/watch?v=qqLFTnQoLtY>

私が今最も注目している女性歌手の新譜『Amidst the Shades』の中の 1 曲(作曲はブリテン)。「孤独と悲哀」をテーマにした曲集。

◆BACH // 'Cello Suite No. 1 in G Major, BWV 1007: I. Prélude' by Miriam Prandi

<https://www.youtube.com/watch?v=wAWCoFWCyMs>

2025 年に初めて知ったイタリアの女性チェリストによる、『バッハ:無伴奏チェロ組曲』。久しぶりにこの組曲の全曲を聴き通した。なんと心地よい演奏か。

◆WALKER, L.: Choral Works (Resonus Classics)

これまた 2025 年に出会い、衝撃を受けた、英国の若い女性の作曲家の初アルバム。シンプルな和声の進行だけで万人の心に染み入っていく音楽を作るやり方。以下に数曲を並べておく。

・Anna Lapwood, The Chapel Choir of Pembroke College, Cambridge, Molly Hord - A Hymn for St Cecilia

<https://www.youtube.com/watch?v=sKeR2YCoZyE>

・VOCES8: Give Me Your Stars by Lucy Walker

<https://www.youtube.com/watch?v=fgxQcA9Ftt8>

・Lucy Walker - Today (Official Score Video)

<https://www.youtube.com/watch?v=b6vbC4l6EvI>

・Lucy Walker - O nata lux (Official Score Video)

<https://www.youtube.com/watch?v=U8LnwrZujCU>

◆Ravel - Piano Concerto for the Left Hand | Yeol Eum Son

<https://www.youtube.com/watch?v=9sxRNTZaIR8>

2025 年はラヴェル生誕 150 周年だった。ラヴェルの作品はすべてが名品で非常に完成度が高い。そのなかでもあえて一品を、と求められれば、私はこの「左手のためのピアノ協奏曲」を挙げる。ピアニストの手や身体の動きを追いながら味わうことの魅力をなんとさえいえるのか。